
K-GAME

薬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K - GAME

【Nコード】

N9011R

【作者名】

薬

【あらすじ】

ある日巻き込まれたのはゲームの世界！！

生き残るためには強くならねばならないこの世界で、果たして主人公は生きていけるのか。

能力あり、戦闘あり、恋愛……あるかなあ？

主人公最強物ではないと思います。途中からなるかもしれませんが、最初は弱いところから始まります。

あらすじは、よく変わります。どれもじっくりこない説明なので。

プロローグ

身を起こすと、目の前は一面に花が咲き誇っていた。一輪、一輪は大きくないが、小さく咲き誇る花たちは美しく、眠気を誘っていく。その中で、さながら俺は名画の中の染みだろうと思う。コートは染め抜かれたように真っ黒、黒目黒髪と相俟あいまって完全にこの光景をぶち壊している。春の陽気にも似た風を感じながら、うとうととしていると、

「カズヤ、そろそろ行くわよ！」

遠くから少女の声が聞こえてきた。カズヤ　少女に呼ばれたそれが俺の名前だった。ここが日本ならそこら辺に転がっているような、珍しくともなんととも無い名前だ。

俺の身長は百六十センチくらいで、黒目に黒髪を肩口まで伸ばしている。背中に一振りの日本刀を持っているが、腰に挿さない理由は刀が地面に擦れそうだからだ。

俺がぼんやりとして返事をしないでいると、声の主は近づいて来て目の前に屈かがみ込んで顔を覗のぞき込んできた。

「カズヤ、聞こえてる？」

少女の名前はリン。腰まで伸びている緑色の長い髪をポニーテールに束ね、瞳は涼しげな翡翠色ひすいをしている。腰には不釣合ふじりあいな装飾そうしよくの全そくされていない、実用簡素じつようかんそな日本刀が一振りだけ差してあった。とても整った顔立ちなのだが、刀同様着ている服も飾り気のない動きやすそうな服で本音を言えば少々勿体無い。着飾れば　今でも充分に美少女の部類に入いることは間違いないが　、もっと美しい華になるであろう。

「聞こえてる、リン」

「だったら返事しなさい」

リンに軽く注意され、起きながらコートについた草を払い落とす。その仕草で、俺としてはあまり好きではないのだが草特有の匂いが

鼻をくすぐる。因みに、怒られて分かる通り俺よりも多分年上だ。見た目から十六〜九歳くらいだと思われる。実際に訊いたことはない。マナーの問題ではなく、ここでは歳など関係ないからだ。

「ふわぁ……さて、旅の続きに戻りますか」

「珍しいわね、和哉がこんなところで昼寝がしたいだなんて」

「偶には、休憩も必要なのさ」

肩を大袈裟にすくめて見せる。

「普段から力抜いてると思うけど？」

くすつ、と笑いながらリンは言う。確かに、と言いながら俺達は雑談を交えて笑いながら歩きだした。

しかし、俺は頭の中ではあの時のことを思い出していた。死ぬまで忘れないであろう、紛うこと無き俺 いや、多くの人が狂わされたあの忌まわしい出来事を。あの日も俺は、静かに生きているはずだった。地球で一つの部品のように、ただ何も考えることもなく……。

「ようこそゲームへ」

いきなり掛けられた声に、大勢の人々は当初動揺するだけであった。あいつは何を言ってるんだ、という視線で見上げる者もいれば、神を見るような目をする者もいる。

そこは緑色の草がどこまでも続いて、涼しい風が流れている草原だった。その空中で一人の少年が立っているという異常な現象を除けば普通の光景であろう。そんな場所に大勢なんて言葉では表現が出来ない程の、おびただしい数の人が集まっていた。いや、根拠はないが集められたと断言できる。

しかし、これだけ大量の人がいても、不思議なことにその少年の

言葉は浸透するようにどこまでも明瞭に聞こえた。

「私は鏡八。君達プレイヤーからしたら神にも等しき存在だ」

プレイヤー……？ 周りからざわめきが起きる。俺も頭の上に疑問符を浮かべるが、それに対する回答は俺を含め誰も持ち合わせてない。

この少年以外の誰も。

「諸君の中には気付いているのも多いかもしれないが、ここは地球ではない。まあ、夢幻の類と解釈するのも各個人の勝手だが、敢えて言おうここはゲームだと」

「ゲーム……？」

「……何を言ってるんだ？」

周りから更に疑問の色が強くなった気がする。当然だ。夢幻の可能性を否定し、現実ではなくゲームだと言い張ったのだから。

そして、ざわめきが最高に達したとき少年が再び口を開いた。

「諸君等にはゲームをクリアしてもらおう。私が君達に求めるのはそれだけだ。それ故、君達が誰を殺し、欺き、生かすかは自由だ。そして、GAME OVERは全ての終わりだと言っておこう。」

いや、こう言った方が分かりやすいかな。ここはゲームの世界であるが死は現実同様死だと」

口の端を歪めて語る彼の内容はほとんどが理解出来なかった。いや、きつと理解したくなかったのだらう。だって、それは

「……ゲームだって言うのに、死んだら終わりってことじゃないか？」

脳が理解を拒んでいるからお陰で、声は震えてもいなかった。もしそれが本当だとしたら、ここがゲームの世界だろうと関係ない。死ねば全ての終わり。ゲームはセーブデータをロードすればいい。しかし、ここはセーブなしの一度の死が全ての終わりに繋がる最悪のゲーム。

「何故このようなことをするのか？ これは夢ではないのか？ などと甘い幻想を未だに抱いている者もいるようだが、その問いは無

駄だ」

言い切ったとばかりに少年は虚空に消えた。そして、痛いぐらいの静寂が打って変わったように一つだけどこかで叫び声があがった。それに続くように色んな所から罵声や叫び声、泣き声が聞こえてきて　一瞬で聞こえなくなつた。気が付けば、先程とは違う草原で倒れていた。おびただしい程の人もない。俺は立ち上がり、取り敢えず歩き始めた。その道がどこに繋がっているかも知らずに。

一方的な説明と共に、その日人類がプレイヤーとして強制参加させられたゲームが始まった。悪夢のようであり、本当に夢ならどれ程良かったらうか……。

ナレーター 1

ゲーム開始と共に個人的に観察したことを書いてみる。

まず一つ目、このゲーム ローカルゲイム 彼の言葉を借りるなら だがジャンルとしては間違いなくRPGだろう。モンスターが出るわ、プレイヤーに殺されかけるわ。最悪だ。

二つ目、プレイヤーは肉体的な歳をとらない プレイヤーは肉体的年齢を自由に定めることが出来る。つまり、成長したいままで止まるらしい。未だにこの問題は、あらゆる所で検証段階である。
。しかし、肉体的な歳をとらないのは当然のことではある、何故ならここはゲームなのだから。

三つ目、ゲームには地球外生物が沢山だ。先述した通り、モンスターは出るし、リンみたいなのはいるし。ここで誤解して欲しくないが別に性格がモンスターだとか、そういうオチじゃないからな。普通に緑色の髪に翡翠色の容姿を持つ人種が地球上にいなかっただけのことだ。

四つ目、能力と称する正体不明の謎の力がある。雷やら炎を使うプレイヤーもいるし、果ては頭を抱えなくなるようなものもある。

五つ目、これが一番重要なことである。事実上ゲームは終わらない。根拠として挙げられるものとして

「うーん……何してるの、カズヤ？」

「何もしてないよ」

寝ぼけ眼のリンに言われて思考を中断して、書きかけのノートをコートの内側に押し込んだ。外界に意識を向ければ、木々が鬱葱と

生い茂しげっていて分かり辛いじりが、日が昇あり始めたばかりだ。起きるにはまだ早い時分じぶんだ。

「そう……お休み」

「お休み」

すうすう、と可愛らしい寝息を立てて眠るリンの寝顔を見て髪を手で梳すく。さらさらとした髪が手中で揺れる。すると、整えられた様なリンの美しい顔が途端に嫌そうになった。

「おいおい、ちょっと傷付くぞ」

小声で苦笑する。それから隣に座り込んで、リンが起きるまで待とうかと思った。一度本格的に起きてしまえば、眠る気など全く起きなかった。それ故に、こんなくだらなことに時間を費やしているのだ。ノートを再度開いて、もう一度書こうとして止めた。

しかし、森の中で野宿だったのだが意外に涼しくて良かった。静寂の中を心地よい風が吹き抜けて、手を傍らに置き

「誰だ……!!」

鞘から刀を抜き、低い声で語りかける。これだけ風が吹いているというのに、木が揺れているのに関わらず周りからは木々がざわめく音が全くしない。

ただの思い過ごしならばよいのだが、このゲームでは些細ちさいな見落として命を落としてしまう。事実、それが原因で死んだものなどいくらでもある。

「おいおい、死にたいのか？」

木々の隙間から呆れたような声と共に、尋常じゃない程の殺気が向けられる。一步でも動けば殺されると断言出来るような錯覚すら覚える程だ。殺気については、この世界に来てから初めて感じる様になった。それほどまでに地球が平和ボケしていたのか。或あるいは、この世界特有の雰囲気にも呑まれたか。理由は定さだかではない。

冷たい汗が背中を伝う嫌な感覚だけが妙にはっきりと感じられる。緊張と極度の集中状態だからだろう。

「そのまま、ゆっくり前向いて歩け。女の方は起こすなよ?」

どこか楽しそうに言う声は少年のものだ。音が遮られたことからして、何かしらの能力は持っているかと仮定するべきだろう。傍らのリンを一度だけ横目で見て、立ち上がり木々の間を慎重に歩き出しある一点で止まった。

「どうした? 歩け」

声は促すが俺は動かない。否、これ以上は動けない。

「無理だ、お前は俺を殺す気か?」

「何を言っているのか、分からんな。……ククク」

沸点が低いのは自覚しているが、からかわれていると思うとむかづいてくる。こめかみを引き攣らせながら刀を一閃する。すると、糸のようなものが切れた。

「ワイヤーだな、しかも首の高さに」

「流石は見込みがありそうだな!」

少年はトラップを無効化されたというのにどこか嬉しそうだ。まるで、子供が新しい玩具おもちゃを手に入れた様な声だ。声からして、同じくらいの歳のような気がするのだが……。ますます、意図が掴めない。

「貴様は誰だ!」

「ナレーターだよ」

その一声と共に殺気と視線が消えた。辺りは次第に音を取り戻し、風は緩やかに俺の首筋を撫でて行った。何故だか、その一撫では刃やいばが掠めたかのように俺を震わせた。

ナレーター2

石畳の広がっている綺麗な町並みを、欠伸を噛み締めながら歩く。レンガで建てられた家が立ち並び、店が色んな所に出ていて目移りするが視点が合わない。理由としては連日の睡眠不足が祟っているせいだ。

「危ないから近くの街に行きましょう」

リンの一言は、謎の人物からの接触を考えれば街に入るのは悪くないように思えた。街中でまで暴れるような大物ではないと判断したからだろう。このゲーム、モンスターを倒す人がいるが中には人を殺すのがいたりするのだ。大規模なものだと、市場で剣振り回して十三人を殺したものなんかもあった。そして、プレイヤーは人数に関わらず人を殺してる可能性は高い。山賊などが出るのだから、殺していないプレイヤーの方が少ないのだ。

しかし、万が一森から街まで尾行していたら、被害が増える可能性も存在したが所詮他人の命だ。それらを全て考慮してのリンの言葉だった。

「ふああ……眠い」

宿で寝ているも良かったのだが、町を見ておきたい気分になったのだ。レトロな風情を感じるこの町並みは、見ても飽きない。因みに、リンは宿屋でぐっすり寝ている。

しかし、こうして見れば色んな人がいる。黒髪の人がいれば、青い瞳など多種多様な容姿を持つ人々がいてアニメかゲームのように幻想的で感動だ。……大剣やら斧やら物騒なものを所持していなければな。

「コーヒー、一つくれ」

近場の酒場のような所に入って注文をした後、窓辺の席に座る。ガラスが無く些細な埃が入ってくるが気にしない。少々待つと、かなり苦そうなコーヒーが運ばれてきた。試しに口に含んでみると

「うえ……苦っ!？」

「そんなに苦いかい？」

突然声を掛けられ、びっくりというか身構えてしまったのは仕方
がなかるう。今日一日生き残るかも賭けに等しいこのゲームでは、
警戒心は本能のお陰が発達している。

声を掛けてきたのは黒いフードを目深まぶかに被かぶった少年だった。薄手
の手袋なども付けている為、僅わずかに口元と黒髪が覗のぞくばかりだ。暑
い最中その格好はいかなものかと思う。……はつきり言っいて怪し
い。

「結構苦い。というか濃ゆいぞ、これ」

「へえ、そうなんだ。すみません、僕にもアイスコーヒー下さい」
注文したかと思うと、少年は勝手に向かいの席に座った。その拍
子に腰に付けられていたナイフが揺れたのが印象に残った。高級そ
うなものではないが、鞘さやに収められているナイフからは何処どこと無く
嫌な感じがした。

僅わずかに足の位置を変え、何があっても動けるようにしておく。

「ねえ、君はこのゲームをどう思ってるんだい？」

唐突とつとつな質問に、何と答えを返すか迷った。

しかし、訊きかれた内容が問題だった。ゲームについて思考するの
は禁忌タブーに等しい。誰もがこんな世界を望んでいないのだから当然だ。
楽しかった地球に戻りたいと言う者もいるし、死にたくないと言う
人もいる。愛した人も、憎んだ人も、強者に弱者、富める者も貧し
き者にも、皆等しく死が色濃くあるこの世界を誰が好むというのか。
「皆、嫌だと……地球に戻りたいと言っている。誰もが、きっとこ
んな残酷な世界を望んではいないだろう？」

「ははは、物は言い様だね。僕は君に訊いたんだよ？ まあいいけ
どね」

少年はアイスコーヒーを一気に飲み干した。その直後口元がびく
つ、と痙攣けいれんしたのは見逃さなかった。当たり前だ、こんな濃ゆいと
いうか苦いコーヒーを一気飲みしたらそうなるだろ。

「げほっ……何だ、このクソ不味いのは!？」

「理解は出来るが落ち着けて。すいません、ミルク一つ」

あまりの驚きようで口調が最早別人だ。周りの目が集中して、中にはガラの悪そうな男がこつちを睨んでいたり心臓に悪い。心なしかミルクを運んできた定員の目も怖い。

「取り敢えず、これでも飲んで落ち着け」

「ああ、すまないね」

奪い取るくらいの速さでミルクを掴むと、味が分かるかも怪しい速度で喉に通していた。それからコーヒーを飲んだことを心底後悔したらしく、一つ小さく息を吐いた。

「ところで、君は旅行か何かでここにいるのかい？」

「いや、ゲームクリアを狙ってるんだ」

ゲームクリアの条件は意外に単純だ。ゲームのクエストの様なもので、ドラゴンの討伐だったら殺すみたいなものだ。まあ、生憎とそんな条件だったことはないが……。

「なら、僕も連れて行ってくれないかい？」

「いいけど、死ぬかもしれないぜ」

俺としては、何があるかも分からないから訊いたのだが。

「くく、なかなか君は冗談が面白いね」

厚顔不遜に笑う少年の口元は楽しそうに歪んでいた。

ナレーター3 (前書き)

最近、友人が小説書き始めたんっすよね。
面白いの書いてくれるといいんですけど……。

ナレーター 3

「かくかくしかじか、以下略で、という訳で、ゲーム攻略に一人付いてくることになりました」

「そう、よろしくね。ところで、あなた名前は？」

俺と少年はリンに一度説明する為、宿に戻ってきていた。宿はこの街の規模にしては簡素ものだが、休息を取るには十分だったらしくリンの顔色も優れていた。

「あつ……聞くの忘れてた」

「えつと……僕はKと呼んでください」

一瞬言い淀んで答えたのは、Kという奇妙な名前だった。このゲームの性質上詐欺などが多いため、こういう風に偽名を使う人も少なくない。あとはお尋ね者だったり、後ろめたいことのある人間くらしいものだ。声から察するに、歳もあまり離れていない16歳くらいだと思う。そんな歳で後ろめたいことを抱えるか甚だ疑問だ。それらを鑑みても、やはり詐欺防止だろうか？

「そう、Kね。私はリン、こっちはカズヤね。どうせ、名前教えてないんでしょ」

一瞬不可解な表情になったものの、リンもその意見に辿り着いた様で納得したようだ。しかも、俺が名乗っていないのも勘付いていたらしい。流石よく気の利くリンだ、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ふああ……でも、一休みさせてくれ。眠たくて仕方が無い」

先程から今にも意識が飛びそうだ。頭が回らないし、欠伸も止まらない。

「寝ときなよ、僕はリンさんと今後の打ち合わせをしとくから」

「そうね。おやすみ、カズヤ」

「ああ」

そのまま布団に倒れ込み、泥のように眠った。

次に目が覚めたのは、まだ夜が白んできた頃だった。変な時間に寝た為、変な時間に起きたのは理解出来る。人によつては体内管理をしておけば、眠くなる時間も起きる時間も割と一定するらしいのだが生憎と寝たければ寝る、起きたければ起きるのが俺だ。しかし、今この時ばかりは若干寝るのに躊躇ためらいが生まれた。

「もう一度寝るか……なんて言えねえよな？」

「別にいいわよ、寝てても」

面白そうに微笑むリンが、窓際の椅子に腰掛けていたのだ。謎の男の接触に加えてKの警戒だろうか？ Kも一見優しそうな男に見えるが、このゲームで見た目だけの性格には何の意味も無い。本名を名乗らない以上、危険人物である可能性も無い訳ではない。それに、あの接触を謀はかってきた奴が街まですんなり通したのも安心できない。街の人が言うには、あの森は通る人も少ないそうで盗賊の類ではないはずだ。俺たちを狙つての待ち伏せとか言われた方が納得出来る。

「まあ、いいや。リンは寝ないのか？」

「私は大丈夫よ。カズヤこそ寝たら？」

「この状況じゃ寝ねえよ」

流石に寝顔を見られながら寝たいとは思わん。見られながらじゃ寝れないとか、そこまで神経は細くないが どちらかと言えば太いか？ あまり気持ちのいいものではない。見るのは好きでも、見られるのは嫌いなのだ。

「なあ、なんでKを連れて行くの賛成したんだ？」

少し気になつていたのだ。根というか、見た目からというかリンは優しいのだが、リスクを鑑かんがみれば得体の知れない今日昨日知り合つたばかりのKなど連れて行かないだろう。そこら辺の意図もあつ

て軽く尋ねたつもりだったのだが、リンは言い辛そうな困ったような顔をした。何か言おうとするのだが、どう言っていていいか迷ってる感じだ。

「やっぱりいいや。リンの一目惚れということにしよう」

「はいはい。違うから」

雰囲気能耐えられなくなった俺は取り敢えず話題を切り上げつつ、空気のある程度和ませようとした。和んだかは兎も角、話題の切り上げには成功したようだ。

「ねえ、カズヤ。あなたはこのゲームに満足してる？」

リンは躊躇ためらいがちに尋ねてきた。まるで、そこに重大な分岐点があるようだ。何故そんな質問をしてきたのか分からないが

「さあな」

と、曖昧に返答した。

ナレーター4（前書き）

友人がこの小説の絵書いてくれたんですが、書きかけだったんですよねえ……。
いつか絵載せてみようと思います。

ナレーター4

朝目が覚めても、もやもやした感じが残っていた。昨日のリンの問いが、未だに俺の脳裏に焼きついて離れなかったからだ。明らかに昨日のリンの質問は普通ではなかった。俺が寝ている間にKと何かあったのだろうか？

頭を悩ませながら朝食を食べる為に宿の食堂に向かった。朝食は値段に見合った、簡素なパンとスープだけのものだった。

「朝はパン派だからいいんだがな……」

地球にいた頃は、朝はパンのみだったからな。スープが付いているだけでも、豪勢に感じるくらいだ。更にコーヒーが付いている所もいい！

だが、今朝は嬉しさなど微塵も無くリンの態度が気になった。一日に二回も同じ様なことを訊かれるとは 正確には次の日になっていたが 禁忌な話題という意識はないのだろうか、などという発想すら出てこない。それに、Kを連れて行くことへの反対の無さだ。こればかりは全く分らない。

「まあ、別にどうでもいいけどさ」

言ってる事と裏腹に、一度気になるとずっと引きずる性格なのだ。自認してる所が余計に質が悪い。

その後も、一人ぶつぶつと呟き続け食堂で注目を浴びていたというのは、俺の精神状況を考慮して黙っていて欲しいところである。

「おはよう、よく眠れたみたいだね」

「ああ、Kも元気そうで」

宿の前で落ち合ったKは、やはり暑そうなコートを目深まぶかにかぶっていた。しかし、ここから見える口元にはうっすらと汗をかいている。当人も暑いのだろうに、何故ファッションにそこまでこだわるのだろうか？

「あら、カズヤもKも遅かったわね」

話をしていると、通りからリンが歩いてきた。何故宿からではなく通りから？ と、思ったが多分市場にでも行っていたのだろう。一つ言っておくが、俺達が起きるのが遅いんじゃないかとリンが早いだだけだ。

「で、次はどこ行くのさ。東西南北、さあどこだ？」

「それなんだけど、ここから東に行くと大きな街があるんだ。そこに行くことになったよ」

「東……確か、そこには地図じゃ荒野しかなかったはず。あとは山とか谷とかで、街なんて一つもなかったはずだが……」

普段は地図など見ずに気の向くままに旅する傾向があるのだが、以前見た地図ではそんな場所には何も無かった気がするのだ。存在してないはずの街……そんな情報をKはどこから仕入れてきたんだ？ 訝いぶかしげな視線に気付いたのか、気付かなかったのかは分からない。フードが邪魔で表情を読み取ることが難しいからだ。ただ、口元が堪えられないかのように笑みの形に歪んでいる気がした。

「じゃあ、行きましようか」

「楽しみだよ」

「……眠い」

三者三様な言葉を口にしながら歩き始めた。

ナレーター5（前書き）

GW入りましたね……正直家のあちこちが五月蠅いです。
皆家に大集合ですから。

ナレーター 5

街を出たのはいいが、そこからは最悪な旅路を予想させた。荒野や山に至るところか、街の出たすぐの草原ですら狼が出てきて面倒だった。

しかし、Kは見れば見るほど異様だった。その出で立ちも奇妙だが戦闘の冴えが恐ろしい。まるで、ナイフを自分の体の一部のように操るのだ。

「一丁上がりつと」

今だつて向かってきた狼を避けるでもなく、右手に持ったナイフを一閃しただけで倒した。まるで腕の延長線かのように、指揮者がタクトを振るうようにごく自然に振るうのだ。芸術のように甘美でありながら、研ぎ澄まされた刃のような恐怖を与えてくる。

「どうかしたのかい、カズヤ？」

「何でもない。ただ……」

「ただ？」

言い返す言葉も見つからず無言でいると、苦笑いの雰囲気がKから発せられた気がする。生憎とフードのせいで表情が如何せん分からない。敵がいなくなるとKは戦闘中とは違い、緩慢な動作でナイフに付いた血糊ちのりを払いながら腰の鞘に収めた。

「ふう……でも、この速度じゃ夜までに目的地に着くのは無理そうね」

「そうだね、夜は森で野宿かな？」

地図を開いて見れば、小一時間程した所の小さな山を越えて森に入るらしい。太陽が真昼の空に大きく出ている今から考えれば、問題なく進んだとしたら日没の頃には森辺りにいることになる。大抵、日が沈んだ後の移動は行わない。明かりが無いし、道も分からなくなってくるからだ。戦闘なんて以ての外、論外だ。

「いやしかし、連れて行って貰えて良かったよ。流星にこの距離の

戦闘を一人でこなすのは骨が折れるからね」

「確かに、面倒だな」

言ってる間にも狼が沸いてきている。正確に言えばこの狼も似てるから便宜上狼と称してるが、地球ではないこの世界では狼と呼ばれないのかもしれない。しかし、不思議なことに地球に存在していた狼もそんなに変わらないうちに思える。更に言えば、多様な生物が存在するこのゲームだが地球上に存在していた生物と同じものが多い。何も生物に限った話ではないがな。気温、気圧、何もかもが地球に似ている。ちよつと変わってるが、地球の環境に近い。

「まったく、面倒ね」

「カズヤ、大丈夫かい？何か考え事しているみたいだけど」

「……大丈夫だ」

キンと、金属質な刃物の響きが鳴り渡る。リンは型に則のつとっているが、俺とKはまったくの無型だ。Kは知らんが、俺の場合刀を使うことなどない学生の身分だったのだからだ。

『グルルルウ……』

「……せいっ！！」

一番先に動いたのはリンだった。狼の動きを凌駕じょうがする程の素早さで近付き切り下ろした。一瞬で死んだのだから。狼は刀が刺さったまま動かなくなった。それを無表情に引き抜くリン。

「ガウウ！！」

それを見て狼が二匹動いた。狙いはK。Kは機械的というか非生物的な動きで一匹目を冷たく切り捨て 二匹目は急に進路を変更、俺に走ってくる。しかし、それにKが懐から出したナイフを投げる。

『ギャン……！！』

首元に当たり悲鳴を上げたが、最後の力を振り絞ってKに襲い掛かる。俺に向かって走っていたため、都合Kの後ろを取った形での体当たりだった。更に、噛み付こうとした所を避けるのではなく、逆に口の中にナイフを押し込む形で脳を貫通させた。俺だったら、絶対に避けていただろうな。

Kが手の甲を口元に持っていくのを横目で見ながら、俺は前方の狼に真っ直ぐ走って行った。それを狼は横に避け左側から襲い掛かってきた。右手の刀を振るには遅い。なら

「ッ！！」

噛み付こうとしてきた狼の首を左手で掴み刀で首を落とす。技も無い、キレもない。なりふり構わず戦う俺らしい戦い方だった。

「さあ、先に進みましょう」

リンの声を聞きながら俺たちは急いで歩いた。横ではKが傷の手当をしているのが見えた。

ナレーター6（前書き）

いや、ほんと久しぶりに投稿します。

読者の皆様には申し訳ない（あつ、読者がいないか）。

もつそろそろ、三日に一度くらいは更新したいんですけどねえ。

ナレーター 6

「……ようやく着いたか」

「そうだね、流石に山越え谷越えはキツイね」

横でKが苦笑しながら言う。一週間程掛け、谷と山を越えて時に迂回して進んだ。そうして、ようやく街に辿り着くことができた。

しかし、これが街とは言えるのかは甚だ疑問だ。何故なら、活気のあるべき市場に人が少なく、店も軒並み閉ざしてある。最早これは

「戒厳令下ですか？ て言いたい感じだぜ」

「いやいや、普通に考えて人気無いだけだから疫病とかじゃないの？」

そりゃそうだ。戒厳令というのは戦争状態だし、普通。山や谷に囲まれたこの地形では、空でも飛べぬ限りどこにも戦いなど仕掛けるなど到底不可能だ。リンに宿を探してもらい俺とKで街を軽く探るつもりだったのだが、これでは聞き込みすら出来まい。

「ゲームクリアの為にここに来たけれど。今回は一体何が条件なのか」

フードの中から軽い溜め息と独り言が零れる。半ば誰かに聞かせような感じな言い方ではあるが、暇潰しにでも訊いておくか。

「Kはどこまで知ってるんだ？ このゲームのこと」

「中々に本質的なことを聞いたね。別に僕が知ってることくらいなら、教えてあげるよ」

口ぶりからして、知ってることが少々あるらしい。そして、どこか楽しげな雰囲気だ。しかしこの街の事といい、どこから情報を仕入れているのか不思議なやつだ。

「これまでゲームクリアは、幾度かされてきたのは知ってるよね？」

そう、このゲームは過去に幾度と無くクリアされている。俺が把握しているだけでも両手の指に余るほどだ。しかも、この世界に連

れて来られてから二ヶ月も経つか、経たぬかの内にだ。意外と人間の順応力も馬鹿に出来ないのかもしれない。

「噂じゃ、クリアした奴は元の世界に戻るってのがあったな」

「あれは嘘だよ」

期待はしていない。流石に、そんな噂話が本当だとしたらこの程度の回数しかクリアされないはずがない。人間パニックになると最初の内は物凄い勢いで行動するからな。無言で先を促す。

「このゲームは一種の平行世界パラレルワールドになっていて、ゲームがクリアされるとプレイヤーは他の世界に飛ばされる。例えるなら、ボスを倒したら次のダンジョンに行けるようになった感じかな？ あとはクリアすると特典と称して、鏡八から能力や武器が貰えることがあるとか。因みに僕は貰ったことはないけどね」

壮大なスケールを、そんな言葉で例えるのは無理がある様な気がする。クリア特典って……そんなの聞いたことも無い。というより、鏡八は一体何がしたいんだ？

「要するに鏡八にとっては、俺たちの命を賭けたゲームすらも娯楽でしかないということか」

「話はこれくらいにしようか。リンさんも帰ってきたみたいだしね。遠くにリンが曲がり角から出てきたのが見える。」

「困ったわ、開いてる宿が一つもなかったわ」

「空いてるではなく、開いてるか」

言葉の微妙なニュアンスをつぶさに感じ取ったが、現実問題としては休める宿が無くては疲れも十分に取れない。皆程度の差こそあれ疲れているはずだ。因みに疲労している順に俺>リン>Kの順だ。詰まる所、俺が一番疲れている。

「だけど、この静けさは異常じゃないのかな。疫病でも流行ってるのかい？」

「それだけど違ったわ。どうやら、ただの通り魔のようよ」

「ただの、通り魔ねえ」

日本にいたときは通り魔が出た時はかなり警戒するものだ。まあ、

流石にここまで状態には陥らないと思うが。リンのただのという言葉が普通におかしいはずなんだがな、この世界じゃ俺の方が異端らしい。

「仕方ねえ、通りで寝ても俺は構わんし」

「僕は流石に遠慮したいけどなあ……」

Kは苦笑というか溜め息というか、心底うんざりしている様だ。流石に、この硬い石畳の上で寝ても疲労は回復しない。路上で寝るといっものは流石に冗談だ。しかし、このままではその可能性もなくはないのだ。

「仕方ない、僕がもう一度聞いてくるよ」

Kが通りの方へ向かって歩いて行く。リンはその後姿うしろすがたを見てやるせない表情で見た後、こちらを向いた。その時には、いつもの表情に戻っていた。

「宿はなんとかなりそうね」

何故だった今リンが断られたばかりだというのに、Kなら大丈夫だと言うのだろうか？ リンはまたどうしようもなく、やるせない感じの表情を少し浮かべた。

「リンはKのこと知ってるのか？」

俺とリンが出会ったのは今はどことも分からぬ世界の草原だった。倒れていたところを介抱かいほうしてもらったという情けない話だが、それが俺たちの出会いだった。つまり、それまでのリンの過去を多くは知らないのだ。

「知ってると言えば知ってるわ。でも、私よりはあなたの方が知っていたはずよ」

「知って……いた？」

それ以上リンは語らなかつた。いや、語れなかつた。どうやら、Kが戻ってきたようだ。

「いやあ、良かった。当分泊めてくれる宿が一軒だけあったよ」

今の言葉の意味、Kなら大丈夫という信頼しんらい（？）分からない。

あいつは一体何者なのか……俺には、分からない。

鏡八（前書き）

一週間ぶりくらいに書けた!!
俺にとっては奇跡じゃね？

しかし、友達が絵を書いてくれるのが嬉しいですね。

> i 2 6 8 1 3 — 3 4 8 7 <

> i 2 6 8 1 4 — 3 4 8 7 <

鏡八

暗くどこか底冷えのする夜の町を、借りている宿の窓から何をす
るでもなく呆然と眺めていた。あれから三日程掛けて、街の人に聞
き込みをして情報収集に励んだ。

しかし、努力虚しく聞けたのは通り魔の話だけ。この街もやはり
ハズレなのだろうか？ どうもこのゲームをやっているとゲームク
リアとは無関係な場所がたくさんあるのだ。既存のゲームなら範囲
など自ずと絞られてくるのだが、何せこのゲームの範囲は世界一つ
分だからな。当然ハズレも出てくるのだ。

「しかし、今日で十五日か」

その数字は前回の世界でゲームがクリアされ、俺たちがこの世界
に飛ばされてからの日数だ。この数字は日が沈む毎に数えているだ
けだ。一日の時間が二十四時間も定かではないのだから、数える
ことにあまり意味は無い。ただ、なんとなく数えるのが何時の間に
か日課になっていただけだ。

つらつらと取り留めの無い思考を続け、そろそろ寝ようかと思っ
た矢先に控えめにドアがノックされた。Kリンかは知らないが、こ
んな夜更けに一体何用だ？

「カズヤ、入ってもいいかしら？」

「構わんよ」

かちやり、と小さく音がしてリンが入ってきた。宿屋だというの
にしつかりと帯刀していて、夜が醸し出す色気的なものが皆無だっ
た。普通宿でまで帯刀するものなのか？ 俺なんか安そうなベッド
の近くに無造作に放り投げてあるというのに。このゲームでは宿
にいようが殺される可能性もあるんだし、俺が無用心なだけなのか
もしれないが。

「どうしたんだ、もう寝たかと思ったけど？」

「そうね、寝ようかとも思ったんだけどね。これからどうするのか

聞いておこうと思って」

これからと言うと、次の行き先ということだろうか？

「あんまそこら辺考えてないんだよね。気の向くままでもいいんじゃない？」

「言つと思つたわ」

リンは微かに笑みを浮かべて、ベッドに腰掛け手元にあつた瓶を取つた。中では綺麗な赤色の液体が揺れている。ジュースではなく酒の類だ。リンが飲むと思つて買っておいただのだ。

「どうして、こんなものがあるのかしらね？」

悪戯な笑みを浮かべてわざと尋ねてくる。勿論、俺が酒をあまり飲まないのを知つてのことであるから非常に質が悪い。

「リンにあげようと思つてたんだよ」

「ありがと。でも、偶にはカズヤも飲んだら？」

俺がアルコールを取らないのは苦手という訳ではないのだ。いや、たしかにリンには負けるが弱いほうでもない……はずだ。リンはいくら飲もうが顔に赤みは差しても、全くと言っていいほど酔わないのだ。流石にリンの強さと比べると基準が分からなくなってくる。

なら、何故飲まないのかというと単純な問題だ。まだ俺が十六歳だからだ。ゲームの中だしいいだろ、と思つかもしれないがどうしても日本にいた頃の習慣が残っているのだ。

「じゃあ、少しだけ貰おうかな」

しかし、今日ばかりはこの街に来たのに肩透かしをくらって、まあいいかと思つてしまったのだ。

「どうぞ」

瓶と共に置いてあつた二つのグラスに注いで片方を渡してくる。グラスを揺らしてコップの中の赤い液体を揺らして楽しむ。それから、ゆっくりと一口嚙下するが美味しいのかよく分からない。

「リン、これって美味しいと思うの？ どうも、俺にはそう思えんよ」

「そう？ 意外に美味しいわよ」

それから静かな雑談を交え、ある程度の今後の方針を決めた。

「取り敢えずは、近日中にここを発つくらいか」

「そうね、あまりここに留まる利点が無いわね。明日辺りにでもKも含めて相談すればいいでしょう」

「Kか……一体何者なのか、時々考えてしまっよ。俺が言うのもなんだが、あいつは普通のプレイヤーとはどこか違う気がする」

リンはそれを聞いても何も言わなかった。Kの素性に気を使っていないのか、或いは何も言わないだけなのか。どちらにせよ、実のある話では

「キヤーー！！」

「！？」

思考を中断するには充分な程の悲鳴が表から上がった。急いで窓から確認するが見える範囲には誰もいない。振り返るがリンはもういない。刀を取り上げ宿を出る。

男の声だったと思う。

「リンどこだ！？」

「こつちよ！」

声が聞こえる方向に向かうが、裏通りに死体はなかった。代わりにいたのは、リンとあと一人ナイフを下げた男が一人いる。ジーンズにシャツ姿という動きやすそうな服装で 反面、旅装とは言い難くプレイヤーとは思えない 墨のように黒い髪はろくな手入れをしていない。縁の無い眼鏡をかけている。

「馬鹿なっ……！！ 何故、お前がここにいるんだ！！」

「いやはや、おかしな質問をする。逆に問うが、俺以外の一体誰がこの世界に存在を許されようか」

いや、確かに理屈で考えればこいつがここににいるのはなんら不思議ではない。そう言わせるだけの人物だった。

「鏡八……」

「どうした？ 恨みか、怒りか？ 何を感じる、お前の日常を壊し

「たこの俺に」

「楽しげに口の端を歪めている。そう、こいつこそが六十億余りの人々を苦しめた人間なのだ。こいつのせいで、一体何人もの人々が死んだかも分からない。そして、一体何人の者達が人生を狂わされたか。」

「何故、無関係な人を大勢巻き込んだんだ？」

「そんなことが聞きたいのか？ どうせ、お前にはどうでもいいことにカテゴライズされているはずなのにな」

「先程の楽しげな雰囲気から一転、呆れるような溜め息と共に言われた。そして、どこか面倒な面持ちで思考し始める。確かに、俺は他人のことをあまり意識する方ではない。全人類が滅ぼうが死のうが畢竟構わないが。」

「そうだな……一人連れてこようとしたただけだ、そうだった一人だけだ」

「一人？ たった一人の為にここまでしたのか？」

「答えは意外だった。明確な答えを期待した訳でないが、たった一人のためにここまでお膳立てしたのが理解できなかつた。」

「はは、何を人事のように言ってるのか。一人とはお前のことだよ」

シヨック(前書き)

来週はテストなので更新はしないです。

取り敢えず、ギブ・ミー夏休み！！

思つに、前書きに適当なこと書いて後書きにシヨートストーリーでも書いてみようかな？

シヨック

少々呆然としていたのは否めない。いきなりあんなことを言われ、俺のせいで一体何十億の命が危機に晒さらされているのか考えるとシヨックがあった。

しかし、先述した通り他人がどうなるかと知ったことではないのが俺だ。一日経つと何事も無かったかのように何時もの俺に戻っていた。……いや、多少は引きずっていたか。

「何故呼ばれたんだ、こんな世界に」

ベッドに横たわりながら目を覆うように腕を寄せ、呻うめくように言う。そこに開け放たれていた窓から、一撫なでの風が吹き込んで肌の上を滑った。それは刃が掠かすめるような冷たさを想起させて思いがけず僅かに上体を起こす。

そこに何も無いと分かっているはずなのに探してしまう。探したものは無念の元に散った命の無音の怨嗟えんさか。

「ああ……まったく、これじゃ完璧に引きずってんじゃねえかよ」

愚痴ぐちをこぼしながら、緩慢な動作で立ち上がり窓の外を見る。そう言えば、昨日の死体は見つかったのだろうか……？ いや、それすらもどうでもいいことか。今の状態では何も身に入らない

表通りはいつも通り閑散かんさんとして侘わびしい。それを見て、ようやく重たい足を外に向けた。

カズヤがシヨックを引きずっているその階下の食堂では

「まだ起きて来ねえのかよ」

「そうね、カズヤの心情でも察したら？ それに鏡八、あなた何時

までここにいる気がしら？」

警戒心も顕あらわなリンと、いかにもだるそうにジュースを啜すする鏡八。二人の間には一触即発とは行かないまでも、あまり近付きたくなくなるような雰囲気かもが醸かもし出されている。そんなことからか、食堂には誰もおらず話をするには絶好の機会だった。

それにしても、どうして鏡八はあんなことを言ったのだろうか？ カズヤを知っているような素振りだったが、これも何かの罠なのだろうか？ 本当は知らず、はめて楽しむ可能性も捨てきれない。

「カズヤが強くならなないと面白くねえ、まだまだ弱すぎだ。だから来たのさ」

「弱い？」

鏡八の言葉は唐突過ぎた。確かにカズヤの戦闘力は突き抜けて強い訳ではないが、弱いと言いつ切る程のものではないはずだ。それが何故弱いと断言出来るのか。いや、そもそも何故そんなことを気に掛けるのか。

「別に俺てはが出張てはる必要はなかったんだがな。ちょっとした暇潰しも兼ねてだ」

そう言つと、肩を鳴らす。まるでデスクワークをした後のような凝りっぷりだ。

そういえば、鏡八は日頃何をしているのだろうか？ このゲームの絶対的な支配者である彼はしたいことをすることが出来る。そんな彼が肩を凝る様なことをしているとは思えない。

「ならどうしてわざわざ来たのかしら？」

「なに、クリア条件を示してやらねばあいつは動くまい。だから俺がここまで来たのさ」

「親切なことね」

リンが呆れた様な態度を取るが鏡八はまったく気にしなかった。そもそも彼にとってはこの雑談自体が暇潰しの延長線ではないのだから。

「さてさて、条件は何にするか？」

呆れて溜め息を一つ零す。最初からここだけはクリア条件など設定されていなかったのだろう。多分、この世界はこれもそれも全てカズヤの為だけにお膳立てされた世界なのだ。

「さてと、そろそろ行くか」

鏡八は温ぬるくなったジュースを飲み干し、何処かへと消えていった。多分、これから起こるであろうゲームの準備のために。

「本当にこの世界はゲームなのね」

嘆息たんそくしながら窓の外を見る。この閑散とした街も、栄えた歴史も、朽ちていく未来も、草木に至るまで全てが鏡八のものでありゲームなのだ。そう痛感させられるには充分だった。

「私も準備しないとね。カズヤを殺させる訳にはいかないわ」

鏡八が本当にカズヤの知り合いだというのなら、殺すことは無いと思うが一応準備しておくに越したことは無い。

ショック（後書き）

（ショートストーリー）

カズヤ「さて、ここでは色んな質問をしていこうと思う」

鏡八「まあ、ぶっちゃけ初回だからな。それに（小説家の）　？？」

設定作りも甘いからな」

リン「まず、ゲームクリア何時出来るの」

カズヤ・鏡八『…………』

リン「クリア予定はないのね」

カズヤ「いや、あと三話くらいでクリアするさ。よし、それよりリン

のスリーサイズを」

リン「えっと、上から」

鏡八「アホかー！！」

カズヤ「ギャー、殺すな！！　待て、話せば分かる！！」

リン「どうしたのかしら」

因みに、リンは天然が入ってるのでお気になさらずに。

カズヤ「うう……………次回も、適当に期待……………して、くれ」

リン「カズヤ大丈夫！？　頭から血が大量に出てるわよ！！」

鏡八「まあ、セクハラは死刑ものだからな。フッ」

出立（前書き）

テスト期間なのに小説を書くとは何事かと思いますが、少々モチベーションとかの補充を兼ねて投稿しようと思います。

出立

街は人氣がほとんどなく……とは言え完全にいない訳ではない。いくつかの店は開かれているが、やはり住人には覇氣が無い。店で買った果物は少々熟れ足りないものだが、今のこの街ではこれが精一杯なのだろう。

「はあ……」

溜め息を吐きながら裏路地に入る。汚れも気にせず、壁に背を預けて座り込む。もう一度息を吐き、吸い込むが

「!?!」

鼻腔につん、とくる乾いたような鉄の匂い。ぼんやりと横を見れば、長身痩軀な男が血溜まりの中にうつ伏せに倒れている。見紛う事なき死体だ。多分、昨日の悲鳴の主であろう。

「うえっ……俺もこうなるのか、な」

吐き気が込み上がる。このゲームの事実を知れば怒れる人々の手によって殺されることは目に見えている。それでなくても、このゲームは本当にデスゲームなのだ。何時こうなってもおかしくない。男を仰向けあおむけにしてみると、心臓に一突きされているだけだった。鮮やかに思える切り口。男も何をされたのか分からないような驚きの表情のままだ。一瞬で殺されたのが有り有りとして見て取れる。背中まで貫通していない所を見ると小物の刃物だろう。

「包丁……?」

男の死体の下敷きになるように包丁が落ちていた。確かに切れ味は良さそうだが、包丁でこんな芸当が出来るものなのか?

「カズヤ、どうしたんだい?」

びくつ、と体が震えて息が止まった。しかし、その声がKのものだと気付いてすぐに安心する。いや、正確にはKではなかったか。

「鏡八、こんなとこで何をしてるんだ?」

振り返れば立っているのはフードを深くかぶった、ここ数日共に

行動してきたKの姿だ。しかし、これはKではないのだ。

「うん？ どういうことかな？」

「手」

「成程、これは失態だったな」

鏡八は一言で全てを理解したらしい。頷きながら、フードを脱ぎ手をかざして見る。うつすらと残った傷は、ここに来るまでの狼に付けられたものだ。余程注意しないと見えないくらいの治りかけの傷、それを俺は昨日の接触で見つけていてカマをかけたのだ。

「それで、そんな通り魔^{ヤツ}を検証して何になる？」

「お前が殺したのか？」

「ああ、夜歩きには気をつけないとな？ クク……」

楽しそうな笑いではなく、どこか嘲笑に似た笑いだ。まるで、人を虫か何かにしか見えていないようだ。普通の人なら純粹に怖いと感じるはずだが、どこか懐かしく感じる。

「ああ、そっぴやお前のナイフの刃えは素晴らしかったな」

意外にキョトンとした表情の鏡八が面白かった。別に褒められた事ではなく、不意を突かれたからだろう。

「あゝあ、もつたいねえ。記憶がありや、面白かったんだがな」

記憶？ 一体何の話をしているんだ？

「おい、それは」

「東に行け」

唐突な物言いだった。それ以上話す気は無い様で、今にもナイフを抜きそうな剣呑な目をしている。選択を間違えれば今にも肉片に変えられそうな勢いだ。

「行って……何をしろって、言うんだ」

途切れ途切れになってしまったのは、冷たい汗が背中を伝う嫌な感覚のせいだ。しかし、このセリフなら選択を間違っていないはずだ。鏡八の性格はともかく、立場としてはこの問いに答える義務があるはずだ。

「殺せ」

「何を？」

鏡人は何も答えなかった。そのとき、微風そよかぜが吹いた。それは段々と強くなり微風は涼しげな風になり強風になった。

「ッー!!」

砂埃すなぼこじが舞い上がり、目が開けられなくなり一瞬閉じた瞬間に嘘だったかの様に荒れ狂う強風は消えた。過ぎ去った後には、鏡八も死体も何もかも残っていなかった。

「ああ、もう嫌になってくるなあ。ククク……」

別に気が触れた訳ではなく、気合を入れるようなものなのだ。どうも、気が高揚こうようして仕方がない。面倒なのは嫌だが、ようやくゲームがクリア出来そうなのだ。

「リンいるか!! 行くぞ、クリアしに!!」

「はいはい、それで今度はどっちに？」

何故か食料等を買って溜めしていたリンが、裏路地の入り口に立っていた。どうにも疲れた感じのぞんざいな態度であるが、俺は気付かなかった。

「東だ!!」

「はあ……因みに聞くけど東ってどっち？」

「……どちらでしょうか？」

因みに、リンが溜め息を付いて何も言えなくなったのは秘密である。

鬼（前書き）

久しぶりの投稿です。

夏休みに入ったのはいいですが、その分小説を書く機会が減った気がします。

鬼

翌朝、まだ日も昇らない内に俺達は東に向かった。地図上ではこの街は山に四方を囲まれている。事実深い緑色をした木々が鬱蒼とした森が広がり、ひどく鼻に付く土の匂いに満たされたその空間では何が出て来てもおかしくない様子だった。

「一体どこにいるんだって言うんだ!？」

顔にかかった草を払いのけ、イライラしてつい大声で言ってしまう。鏡八には東に行けと言われたが一体どれ程の距離を歩き、何を殺せばいいのか。そもそも、その対象は人なのかモンスターなのかそれすらも分かっていないのだ。

木々が茂り、日が全く差さないとはいえ疲労は蓄積される。それに、暑い中を真っ黒のコートを着ているので汗は止め処なく流れ落ちる。

「カズヤ、焦らなくていいでしょ」

対してリンは冷静で、どちらかと俺に辟易しているくらいだ。同じ距離を歩き続けているのに涼しい顔で汗もほとんどかいていない。「残念ながら雨も降りそうね。これはどこかで休むしかないわよ」「そうだな」

空は暗くなり始め、少し時間が経てば今にも豪雨が降り始めるだろう。リンは軽く辺りを見回して

「降られる前に、雨宿りできる場所に行きましょう」

一つの洞窟を指差した。入り口は三メートルくらいの半円形型で、中は見通せずどこか不気味な雰囲気かもが醸し出されている。

「あ、ああ……だが何かいないか？」

「どづいづいこと?」

「なんか……嫌な予感がする」

そう? と言いなながら、リンは先頭を切るように入って行く。諦めて、本当に渋々ながらリンに付いて行く。こういう時に俺の

いや、プレイヤーにある一種の勘にも似たこの感覚はほぼ間違いないと当たる。リンは何も感じていないのだろうか？

洞窟の中は湿っぽさを感じず、不気味な雰囲気^{雰囲気}に反して中は静謐^{せいひつ}な空気で満たされていた。そして、一つ嘆息した。

「やっぱりか、ここは迷宮なんだな」

入ってみると、蝋燭^{ろうそく}が壁に幾重にも続き薄暗い通路が続いている。しゃがみ込み指で通路をなぞる。

「やはり……」

通路に埃^{ほこり}は積もっておらず、真新しく作られたもののようなのだ

いや、こんなものすぐに作れるのはGMである鏡八^{ゲームスター}を除いて存在しないだろう。

「仕方ない、どう考えても鏡八の誘いだろっしな……」

「どうも、そのようね」

『ウオオオオオ……』

それを肯定するかのようには、通路の後ろから呻^{うめ}く様にゾンビのような物体が……。

「ちょ、待っ」

俺が刀を抜くより速く、リンの居合い切りをする方が速かった。

一瞬のことで軌跡すら見えなかった。

「さあ、行くわよ」

「まったく、何時見てもリンは速いな」

恐ろしいまでの速度だった。何度戦っても勝てないのだろうと、思い知らされる戦いっぷりだった。俺は力任せの戦い方だが、リンは速すぎるまでのスピードを使った戦い方をする。参考にできないのが実に悔やまれる。

そしてどれ程の距離を歩いただろうか、いきなり荘厳な装飾のされた扉が現れた。

「この先か」

「ええ、そうね。そしてあなたの初めての試練が」

リンの声はぞっとする程冷たく、そして首には金属特有の凍^いて付

くような冷たさを感じられた。後ろを振り返るのは無理というものだろう。今振り返れば、リンに首を撥ねられかねない体勢だ。

「一つ訊いていいか？ 何故こんなことをするんだ？」

「鏡八のお願いよ。叶えてあげる必要はないのだけれど」

一つ溜め息を僅かに零して扉に手をかける。扉は見た目に反して軽く、ほとんど音も立たずに開いた。

中は直径三十メートル、高さ十メートルくらいのホールで二階のバルコニーから鑑賞できるような作りになっている。その二階にはやはりというか鏡八が見下ろしていた。相変わらずラフな格好で腰にはナイフを下げて楽しそうな笑顔だ。

「ようこそ……と、言うべきかな？」

「まったく、いい趣味してやがるぜ。はっきり言って悪趣味だ」

「そうかねえ」

鏡八が肩をすくめてみせる。しかし、この瞬間にもリンは入ってきた扉の前を塞ぐ様に立っている。ここを通れなければ反対側の扉しかない。退路の確保を考るが、この配置なら全速力で逆の扉で離脱出来るか……。

「それで、一体何を殺させたいんだ？」

鏡八は何も答えなかった。ゴゴゴオ、と反対側の五メートルくらいの扉が開いて四メートルくらいの巨体が現れた。体表は赤黒く額からは一本の角が飛び出し、瘦躯だが筋肉質な肉体は鬼という言葉

を連想させた。
「マジかよ！？ おいおい流石にあんなの殺せる程、俺は人間やめてないぜ！！」

その手には幅広で肉厚の大剣が握られている。長さはその体躯と変わらぬ長さ、俺など一撃貰えば切られるではなく挽き肉になってしまうだろう。

「さてと、この鬼と戦ってもらおうか」

「おい、こいつを一人で倒せって言うのか！？」

「そうだ、助言も手助けも一切皆無だ。勿論、リンも含めて。その

代わり、こちらからは手出ししないから安心しろ」

笑顔で最悪なことをはつきり言いやがったぜ。無茶振りもいい所だな。それに剣で切られなくても踏み潰されたら普通に死ぬぞ!?

『ゴアアアアアア!』

「ちっ!」

迷宮すら震える程の音量に、思わず刀を抜くことすら出来ずに耳を防ぐ。そして咆哮を鳴き止むと同時に鬼は物凄い速度で走り出した。

「速っ!?!」

その速度を剣に乗せた横風なぎの一撃を、地に伏せるようにしてギリギリ避ける。そして、縦から振り下ろされた斬撃を転がるように横に避けるが

「ぐっ!」

破碎した地面の破片が胸に直撃した。一瞬息が止まるが、体は動く。息をまとめて吐き、立ち上がり鬼の股下を通り抜け壁際まで走る。

「はあ、はあ……どうするか。いや、マジで」

あの巨体にダメージを通すには剣なんかでは無理があるだろう。股下を抜けるときに触れてみたが、正確なことは分からないが筋肉が異常に発達しているのか硬かった。

「今度はこっちからか」

鬼の足を切り込む。

「ちっ、やはりか」

剣は勿論というか、ガキンと金属が鳴り合うような音を響かせて弾かれた。そのまま鬼が剣を振り下ろしてくるが、股下から後ろ側から抜ける。巨体のお陰で回避は容易たやすいが硬すぎる。

「苦戦しそうね」

「そうだな、あいつは勝てそうに無いと諦める癖があるからな」

カズヤが戦っている間に鏡八の隣にリンはいた。冷静に考えれば扉から逃げれるのだが、それすらも思考出来ない程に焦っているのだろう。

今話してる間にもカズヤは防戦一方だ　いや、防戦一方と言え
ば聞こえはいいが勝ち目のない戦いから逃げ回っているだけだ。た
しかに鬼はカスタマイズして体表は硬くしたし俊敏にしてある。は
つきり言つて勝つことは今のカズヤでは難しいだろう。

「はつきり言つて無理でしょ。今のカズヤでは死ぬかもね」

「おお、はつきり言うね。いやいや、カズヤが憐れだ。美少女から
も見放されたとあつては号泣ものだな」

流石に同情の視線をカズヤに向ける。逃げるのに必死で多分今の
話は聞こえていないだろうが、勝利の女神とは言わないがリンから
も見放されたら本当に勝てるのか？　ついつい、縁起でもないこと
を考えてしまう。

「あいつは絶対勝つさ。何せあいつは」

鬼の攻撃は確実に俺を捉え始めている。いや違うか、俺の体力が
刻一刻と落ちてきているのだ。過度の緊張は実際の疲労を何倍にも
増やす足枷だ。

「はあ……無理かもな。勝てる気がしねえ」

それに緊張だけじゃない。握力は弱まり剣を落としそうで、恐怖
が足を竦ませ、息は上がり今にも崩れ落ちそうだ。もう何がなんだ
か分からないくらいに疲弊している。

『ゴアアアアアア！！』

「しまっ」

咆哮を上げ耳を塞がせた隙に接近され、上段から振り下ろされた剣を俺は避けようとした。しかし、疲労で足が震え避けることが出来ず俺は受け止めるしか出来なかった。

「ゴホッ……」

肺から全ての息が抜ける嫌な感覚が妙に残り、折れた刀の破片が腹に刺さっているのを冷静に見つめていた。鬼はそのままもう一度上段から振り下ろそうとしているのを見て、俺は指一本動かさず目を閉じた。

鬼1（前書き）

まさか、一日に二回も更新するとは思いませんでした。

この小説、作者自身書いてて内容が理解し辛いものがあります。

なんとというか、頭では書きたい内容が固まっていますのですが文字では伝えにくい場所が多々ありげんなりしております。

ガーベラさん、どこ直せば分かり易いですかね？

鬼 1

昔……と言うほど古い話ではないが過去を思い出していた。

俺は小、中学校共に虐めに遭っていた。最初は友達の軽い遊び心だったようだ。集団無視、暴行、悪口、持ち物を捨てられたりと色々な手法を使われた。

だが、その話は今は関係ないので置いておくとしよう。それはその後の人生にも暗い影を落とした。対人恐怖症というほどではなかったが、人と接するのが怖くなってしまった。いや、正確には人どう接していいか分からなくなってしまった。

しかし、一人の少年との出会いが俺を生きたいと思わせてくれた。何故か、その顔は濃霧がかかったように思い出せない。

何時頃だっただろうか……招待されたのは。多分、交流ができて少しした頃だったと思う。そいつが作ったゲームをやってみないかと訊かれたのだ。俺はあまり興味を持っていなかったがやると答えたのだ。

そう、この世界こそが俺がプレイしているゲームだ。

目を開ければ、鬼が剣を振り下ろすのがスローモーションで見えた。だが、そんなもの今の俺は眼中になかった。俺が探していたのは、リンの隣あくまで悠然と見ている鏡八だった。

ゲームの主催者だった時点で気付くべきだったのにな。

「思い出したぜ……まったく、何でこんな大切なこと忘れてたんだろうな」

腹に刺さった破片は一先ず無視して、折れた刀を鬼に投げつける。

それを払いのけた僅かなタイムラグで剣を避け、腹の破片も抜き取っておく。

「はあ、勝つても出血多量で死んだら笑いもんだぞ!!!」

鬼が地面に食い込んだ剣を抜くと、ぼろぼろと土煙などが落ちていく。そのまま後ろを振り向き、連続で縦から振り下ろしてくる。それをぎりぎりの所で、サイドステップだけで避ける。

『ゴオア!!!』

当たらないことに痺れを切らしたのか、単調ではあるが確実な範囲を持った横風ぎの攻撃に切り替えた。

「待ってましたよっ、と」

今度は避けるのではなく、逆に突っ込む様に前に出てジャンプする。そして、剣の刃先に乗り振り終わる寸前に弾丸のような速度で飛び出した。

向かう先は二階のバルコニー。

「こうなりや自棄だ」

回収していた壁に折れた剣を叩きつけ、衝撃が伝わる前に手を離し地面を転がる。そのまま通路を駆け抜け、鏡八たちの元に向かう。「借りるぞ」

鏡八の腰に下がっていた鞘おひに納められたナイフを抜き取る。そのまま一階に飛び降り、転がって衝撃を和やわらげる。

カズヤにナイフを取られ、戦闘を見ているが先程とは全く動きが違う。もしかしたら、戦闘前よりも俊敏かもしれない。

「あーあ、あいつには俺のナイフに触れんなって言ったのによ」

「おかしいわね。カズヤの動きが違うわね。いえ、迷いが消えたのかしら?」

「勝てるぞ踏んだのさ」

何か對抗策を見出したか。それじゃなくても、あのナイフは

「クソ野郎が、借りは今殺して返してやる」

鬼の振るう上段からの剣をサイドステップで避けて、剣に飛び乗り、手、肩まで上り詰める。払いのけようとした手が来るより僅かに早く俺のナイフが目に刺さった。

『ゴアアアアアアアアア！！』

そのままナイフを手にしたまま飛び降りる。本来ならばそのまま目から脳まで切り込みたかつたのだが、痛みで顔を覆うように突き出された手から逃げるように飛び降りてしまった。

「さて、もういつか……あれ？」

振り返った俺が見たものは、半分に切り裂かれた鬼がゆっくりと倒れる様であった。ドン、と腹に響くような大きな音を立てて倒れた鬼は、溶けるように塵ちりになって消えた。予想以上というか、有り得ない程の切れ味のナイフだった。

「これでいいんだろ、鏡八」

ナイフの血糊ちりを払い、鏡八に投げる。ああ、と受け取り懐から出した紙でふき取り鞘に納めた。そして飛び降り、こちらへと悠然と近付いてきた。

「まあ、ギリギリ及第点だな」

「俺も思い出したぜ、お前のこと」

「忘れんなよ、一応親友だろ」

鏡八はいかにも落胆したように首を振る。というか、気のせいかな今一応を強調しなかったか？ いや、気のせいだと信じたい……。

「まさか親友に殺されかけるとはな、流石の俺でも想定外だ」

「死なないように微妙にカスタマイズしただろ？」

あれで死なないように……だと？ 腹から血が出て骨の一本くらい逝ってるかもしれない程の重症だと言うのにか？ それを聞いたせいか、単に血が足りないだけなのかくらからする。

「おっと」

「大丈夫、カズヤ？」

ふらついた所を、何時からいたのか後ろに立っていたリンが支えてくれる。そのまま座らされ、応急処置を施^{ほどこ}してくれる。

「さて、これで今回もゲームはクリアされた。お前が進むは茨の道いや、それすらも生温^{なまぬる}い、覇道を進むだろう。さて何時まで生き残れるか」

俺たちに背を向け、語る言葉は多分本当だろう。それでなくても、この世界は生き残れない可能性が非常に高いのだ。まあ、ただ

「後ろ向いてんの照れ隠しか、そんな中二臭いセリフ」

「ちげえよ、殺すぞ」

「あ、照れちゃ」

て、という言葉言い切ることが出来なかった。ちゃき、とほんの僅かの音に全身の毛が逆立つのが分かったからだ。間違いなくナイフをほんの少し抜いた音だ。

「はは、何を言ってるんだカズヤ。あれ、そんなに死にたかったのか？」

「いや、待て！！ 早まるな、リン行くぞ！！」

「えっ、ちよつと!？」

リンの手を引き、鬼が入ってきた扉に向かう。そこは形容し難い色で輝いてるように見える。これが、このゲーム最大の特徴。世界と世界を繋いでいるのだ。いくら終わろうとも、世界を連結させることで果てがない。詰まり、終わりが無いゲームになっている。

俺とリンは光の中に包まれて消えた。

紹介コーナー（前書き）

今日は紹介コーナーを書いてみました。
作者自身まとめとかないと無理そうなんで……色々と。

紹介コーナー

（自己紹介コーナー）

名前：カズヤ

役職：プレイヤー

肉体年齢：十六歳（ゲームの中では基本的に歳取らないので……）

容姿：黒目黒髪、常に黒いコート着用。身長、約百六十センチ程度。

武器：現在、日本刀一振り。武器に慣れていない故に、どんなものでも使うことに躊躇はない。

備考：実質的ゲームの支配者である鏡八とは自称親友の間柄

戦い方は基本的に力任せに斬るだけ

一人称、語尾、口調気分によって色々変わる

名前：リン

役職：仲間、剣士

肉体年齢：十六〜十九くらい

容姿：緑色の長い髪をポニーテールに束ね、瞳は涼しげな翡翠色。

服装は動きやすいものなら何でもOK

身長百七十センチ程度。

武器：日本刀一振り

備考：カズヤの仲間。

戦い方は誰よりも速く斬る、スピード型

心なしか、羞恥心が薄いような……

名前：鏡八

ゲームマスター

役職：GM。ナレーター。

肉体年齢：十六歳

容姿：黒目黒髪。メガネ着用（伊達か度が入ってるかは不明）。身長、百七十センチ程度。

服はシャツにジーンズ、スリッパなどラフな格好を好む。

武器：ナイフ。普通は一本だけだが、二刀流も逆手持ちもスロウイングナイフも可能。

備考：カズヤの一応親友にして、実質的ゲームの支配者

残念なことに、戦闘シーンが少ないような……

〈登場予定プレイヤー、紹介〉

（九十九%くらいの確立で出ます。最早、出ないとしたら作者が小説書かないときくらいです）

名前：本名不明、通称イッチー

役職：プレイヤー、創造神

肉体年齢：十六歳

容姿：黒目黒髪。身長、百七十センチ程度で瘦^{そま}軀。鏡八同様、ラフな格好を好む。

武器：思考

備考：このゲーム最初の神格を得た者。

カズヤ達とは違う時代にゲームに参加した者

実力はほぼゲーム内No.1

神としての能力は思考したことを全て創造すること

（思考したら現実に全て引き起こされる。一部例外アリ）

名前：タツキ

役職：プレイヤー、妄想神

肉体年齢：十六歳

容姿：黒目黒髪、メガネ装備。身長、百六十センチ程度。

武器：銃器ならなんでもござれ。

備考：ゲーム内最大戦力、約三万の仲間を持つプレイヤー

本人は仲間より強くないような……

神としての能力永遠に物凄い速度で妄想する。外界の刺激をシャットアウトしてしまうほど。

(ぶっちゃんけ要らね)

名前：ユージ

役職：仲間、コック

肉体年齢：十六歳程度

容姿：黒目黒髪、中肉中背。身長、百六十センチ程度。

武器：片手剣一本+ (その時の気分)

備考：タツキの仲間にして最強の料理人を目指す少年

火がないところでも料理を作る為なのか火を操ることが可能
最強キヤラ候補

紹介コーナー（後書き）

「プレイヤーと仲間の違い」

カズヤ「さて、今回久々に設けたこのコーナー」

鏡八「え？ プレイヤーと仲間の違い？ 知らね」

リン「いや、GMがそれ言っちゃ終わりでしょ……」

鏡八「冗談だつて、プレイヤーと仲間だろ、主従関係に近いか？

仲間になる人物の条件は色々あるが、あいつらは全員

ゲームの中の世界で育った奴等だな」

カズヤ「……因みに、主従関係としての強制力は？」

鏡八「最低限の拘束かな。」

詰まり、中にはプレイヤーの命令をほとんど聞かない仲間も存在するつてことだ」

カズヤ「まあ、プレイヤーに愛想つかしてどっか行くことはない

という解釈でOK？」

鏡八「まあ、そんな感じだな。因みに、リンみたいなのは貴重だぞ。

掃除、洗濯、料理何でも出来るからな。」

それに美少女なのは間違いない」

カズヤ「確かに……」

リン「取り敢えず、次回のお話はカズヤがゲームを一度クリアして数年後の世界よ。」

……因みに、カズヤの出番はないかも（ボソツ）」

カズヤ「え、何か言った？」

鏡八「取り敢えず、次回を待て!!」

神様 VS 料理人（前書き）

この世界は、カズヤがゲームをクリアしてから数年後のお話です。いきなり戦闘のスケールが違って作者自身げんなりします……。でも、仕方ないんです。まだまだスケールアップするつもりだし。

神様 VS 料理人

木々がそこそこ茂^{しげ}っているが周りが暗くなる程でも、じめじめした湿度の高い空気で満たされているわけでもない非常に過ごし易い森の中を一人の少年が歩いていて。少年は百七十センチ程の身長で黒目黒髪の瘦^{そつく}躯、軽装で武器を持っているような様子もしない。見れば皆が森林浴か散歩をしているのだらうと思うだらう。

しかし、このゲームの性質上安全な場所などどこにも存在していない。例え、どんなに過ごし易い穏やかな場所であるうが、モンスターは出てくる。それを考慮すると無用心だと言えなくない。いや寧^{むし}ろ、プレイヤーの体感では逆に過ごし易い場所のほうが凶暴なモンスターが出現するという噂があるくらいだ。製作者の悪意が見え透けるようである。

少年は無言で歩いて行く。その足取りに迷いはなく、とは言え明確な目的地があるわけでもないようで適当に道を選んでいっているようである。既に日は高く、湿度は高くないが温度は高くなってきたはずではあるが、少年の顔には汗が全く浮かんでいない。

「何だ……?」

少年は歩みを止め、唐突に上を仰ぎ見るて僅かに咳^{せき}くくらいの声で言った。

そして、上空から弾丸などという生易しい速度で言い表すことができない速度で何か降^おってきた!!

「おいおい、今のを避けるのかよ。まあいいさ、今日こそじっくり調理してやるよ。なあ、神様?」

舞い上がった砂埃^{すなほこ}から出てきたのは、なんと少年だった!!

こちらもやはり黒目だが、髪は少々色素が薄く茶色に近い。身長も少し低く百六十センチ程であるう。手に持っているのは幅広だが片手剣であり少々重そうなのだが、少年にとっては苦でもないようで平然と片手で持っている。

「あー……ユージが来たということは、またタツキか。何でこうも面倒なもんばつか来るんだ」

襲撃され押しつぶされたように見えた少年は、何時の間にか五メートル程離れた場所に立っていた。服には一切埃ほこりが付いておらず、あの速度に対応できるなど控えめに見てもまともな人間ではないようだ。しかも、神様と呼ばれていたが何者なのか？

ユージと呼ばれた襲撃者は距離を測りつつも、逃がさぬように視線で牽制けんせいしている。しかし、それを見て涼しい顔……もとい面倒なことになったと疲れた顔を試みせる少年。

「よっしやああああ！！ここで会ったが百年目だイッチー！！」
いきなり木々の間を走って出てきた乱入者は、神様と呼ばれた少年を指差す。因みに、いきなりの乱入に場に微妙な空気が流れてしまったのは察してほしい。どうやら、この少年の名前……では勿論ないだろうが、通称はイッチーと言っのだろう。ということ、イッチーが言っていたタツキと言っのはこの少年ではなかるるか？

黒目で黒髪だが、髪は全く手入れされておらず元気にツンツンと立っている。視力が悪いのか眼鏡をしており、身長はユージとさして変わらないだろう。イッチーが瘦躯しゆこなのに対し、タツキはまあ……中肉中背ちゆうにくちゆうはいややぷっくりと言ったところか。

「行くのだユージ君！！今日こそイッチーを」
「うるせえ、黙ってるカス」

威勢よく命令を掛けたタツキは、ユージに軽く腹を殴られ悶絶もんぜつしていた。ゴキツと骨が逝ったような音がしたような気が……。多分、タツキはプレイヤーでユージはその仲間なのだろう。しかし、上下関係というか主従関係はあからさまに逆転していた。

だが、それも仕方がないのかもしれない。なにせ、ここにいるイッチーとユージの強さはゲーム内最強と言っても過言ではない域に達しているのだ。

「行くぜイッチー！！」

ユージの顔には、戦闘行為そのものに狂喜しているような笑みが浮かんでいる。そして、じりつと足の重心をずらして　消えた！？
多分、常人では視認出来ないほどの速度に達したのだろう。

「壁」

イッチーは一言紡ぐと、がきんと硬い金属音が鳴り響いてきた。見ればユージがイッチーの後方から切りかかっている姿だった。不自然なことに、そこに空気の壁があるかのように刃が空中で止まっている。

「ふはは、まだだ！！　燃える！！」

ユージが歪んだ笑みを浮かべつつ叫ぶと、剣を持っていない左手に炎を纏まといそれを空気の壁へ叩き付けた。多分、炎を操る能力があるのだろう。

「やばっ！？」

イッチーはここで初めて動揺していた。なにせ、ユージの炎を纏った左手が普通に空気の壁を貫通してきたからである。脇目も振らず、土の上を無様に転がる様にしてなんとか回避した。この動きからしても、イッチーには体を張った戦闘をこなした経験が少ないのかもしれない。

このゲームにはイッチーの様な純粋な能力者タイプが、極稀ごくまれに存在するのだ。能力を使い、武器を持つ者を圧倒する程の力を得た者に傾向がある。しかし、それも当然か。能力を用いて武器を扱う以上のことが出来るならば、危険な戦闘を減らせる可能性や面倒な手間を掛けずに済むからだ。

「いいぜ、さて今回は耐えられるか！！」

ユージの手に物凄い炎が集まっていく。更に、それを圧縮させ、更に圧縮、圧縮、圧縮……その手に集う熱量は物凄い温度になっているだろう。近くにある木々は溶け失せ、土も溶解し泥になっている。

人間が耐えられる熱量ではない。イッチーにぶつかれば、間違いなく殺せるだろう。

「熱い、熱い、死ぬ〜!!!」

喚くのは、腹を抱えて悶絶していたはずのタツキであった。基礎回復力が高いのか、単に頑丈なのかユージから逃げていく。いくらプレイヤーとは言え自分の仲間の攻撃に巻き込まれて死ぬのはゴメンだろう。

「燃えるー!!」

「衝撃……!!!」

ユージの手からは荒れ狂うように炎が飛び出していき、イチーの周りからは衝撃波が生み出され互いの間で拮抗し始めた。

「いいぜ、まだまだあー!!」

ユージはもはや狂笑に近い笑みを浮かべ火力を上げる。

「もつと強く……!!!」

それに比例するようにイチーから放たれる衝撃波も強くなる。

そして、結果は呆気なく訪れることになった。二人の攻撃が拡散するように、爆発してしまったのだ。

「やばっ!?!」

二人とも言うが早いかな、いきなり消えてしまった。

この攻撃の余波で隕石が落ちたのか、という程のクレーターが発生したのは言うまでもない。そしてもつと重大なことに、この世界に存在したプレイヤーの総人口の二割が消失したのは紛れもない事実である。

巻き添え

痛みで目が覚めるのは、あまり体験したくないことの一つだと俺は思う。

「痛ッ……!!」

一番ポピュラーなのは筋肉痛だろうが、今の俺はその状況に近かった。寝返りを打った拍子に、体中の擦り傷が悲鳴を上げるように痛んだ。今朝の俺の意識は、何時にも増してはつきりしていなかった。そうその事が無ければ、一時間くらいはいつも通りベッドで寝転がったままだろう。

そう、目の前にリンの寝顔があつたとしても……はい？

「!?!? 何でリンがこ」

「五月蠅い」

全てを言い切る前に後ろから頭を軽く殴られた。振り返ろうとして、強烈な日差しと軽い痛みで顔をしかめつつ叩いた人物を探す。日は高くないようで気温もさして高くなく、まだ朝なのだろう。

「何故、お前がここにいる鏡八……」

「俺がいたら悪いのかカズヤ？」

そこにいたのはベッドに腰掛け、窓に向かいつつ読書している鏡八だった。手に持っているのは……ラノベか？

……一歩譲って読んでる本は置いておこう。取り敢えず、なぜオマエガココニイル……？

しかし、よく見てみれば鏡八の格好はKのときのフードつきコートだ。ラフな格好を好む彼が何故

「おい、鏡八その傷!?!」

「あー、もうこんぐらいで騒ぐなよ……」

僅かに覗く袖口からは幾重にも巻かれた包帯が見える。明らかに戦闘行為か何かをした後のような有様だ。というより俺が驚いたのは戦闘行為そのものではなく、鏡八が怪我ケガをするほどのことをした

という事実いだ。

「というか、それ言ったらためえ等もだろうが」

？ 言われて気付いたが、俺とリンの体にも包帯があちこち巻かれている。それも、俺が巻いたような無残な出来ではなく的確な処置がされている。微かに消毒液臭い匂いが鼻につく。

しかし、よくよく考えてみれば怪我をした記憶が無い。それどころか、宿に泊まった記憶もないのだが……。

「まさか……俺は、酒を飲んでしまったというのか……!!」
「いや何故、そうなる？」

記憶がないだなんて、きつとアルコールが回って酔ってあちこちぶつけて宿に入ったとしか……。

いや、待てリンがここで寝ている理由は……まさか、俺は男として最低なことを

「いや無いわ」

「何がだよ」

リンを押し倒すのは不可能。うん、有り得んわ。

「……五月蠅いわねえ」

「すまん、起こしたか」

「ええ……でもどうして宿にいるのかしら？ 確かどこかの森の近くにいたはずだけど」

記憶を探るように頭を手で押さえながらリンは話す。言われてみれば、森のような所を歩いていた気がしないでもないが混乱した頭では思い出せそうに無かった。

「まあ……なんだ、飯でも食うか？」

やはりコートは暑かったのか脱ぎながら鏡八は提案した。

コートを脱いだ鏡八の体は予め袖口から覗いた包帯を見ていた為、シヨックは少なかつたが体中に包帯を巻いていた。控えめに見ても重傷に見える。

食堂は人払いでもしたかのように誰もいなかった。まあ、普通にこのゲームを操ることが出来る鏡八がやったとしてもおかしくはないのだが。朝食はパンにスープ……そして、何故朝から肉？

「朝から重い飯だな……」

「……激しく同意だ」

鏡八ですら、頭を抱えたい様子で……いや違うな、あいつは肉が食えないんだつたな。何故食えないのかは、普通のプレイヤーなら想像が付かないでもない。

俺たちはモンスターを殺すことがあるが、それ以上に人間を殺すのが精神的に辛いのだ。人を一人殺しただけで、何も喉に通らないほど憔悴した者などたくさんいる。それは人がまだ人であることを、実感出来るのだからいいことだと思う。殺さないで済むに越したことはないのだが。

まあ……そんなことで気が滅入る程、俺もリンも鏡八も細かい神経している訳ではないはずだ。鏡八の場合は、純粹に肉が嫌いなのかもしれない。

「でも、美味しいわよ」

「ああ……まあ、よかつたんじゃね？ よしこれも、食っちゃえ」

リンは朝から肉でもいいのか普通に食べている。俺としては食えないこともないのだが、朝はパンが食わないくらいなのだ。鏡八の皿を移動させるが、鏡八自身何も言わなかつたがほっとしているようだ。

「さてと、話を戻すか……お前たちは倒れてたんだ。つーか、攻撃の余波に巻き込まれて九死に一生を得たというか、ぶつちやけ」
そこで一区切りして、溜めるように間を置いて。

「死んだ」

「いやいや！！ 死んだ、はいいけど は余計だろ！！」

「遂にこの微妙なニュアンスまで体得してしまうとは……プレイヤ
ーの成長恐るべし」

ボケはいいが、もうツツコミを入れる気すら起きん……。という
か、お前本当は楽しければなんでもいいんだろ？

「それで、本当のところはどうだったの？」

「いや、ほとんど言った通りなんだよ。ゲーム内最強候補同士のバ
トルだ、余波で総人口の二割くらい消滅した。そして、その巻き
添えくらったのさ」

総人口の二割！？ 驚きを内心隠せなかったが、他者の命などど
うでもいいためそれほどショックは大きくなかった。

話すのが面倒なのか鏡八は頬杖ほおづえを付きつつ、懐からノートパソコ
ンのようなものを取り出した。ような、と形容したのは何故そんな
ものが必要なかと思うのと……。

「壊れてないか？」

正確に言えばパソコンの残骸だったのだ。半分くらいは綺麗な
だが半分くらいはボロボロ、まるでハンマーで半分だけ叩き壊した
ようだ。

「ああ、大丈夫だって。ちょっと待ってろ、すぐ直る」

何をする気なのか机に置いたまま、放置してパンを類張る。

「いや、直るって……動物じゃねえんだから」

鏡八の言動に付き合うのも面倒、と気にせず少し濃い味付け
のスープを口に含む。

「ぶっ！！」

しかし、それをすぐに吹き出してしまふ事になる。何故なら、壊
れていたパソコンが独りでに直り始めたのだ。壊れた箇所から新た
に部品が生えるように、次々と直っていくのだ。

「言った通りだろ」

鏡八が直ったパソコンを起動させるが、これまた現実的に考えて
有り得ない動きをするのだ。鏡八はパソコンに触れているだけなの
に、画面上にいくつものファイル、文字、画像がほぼタイムラグ無

しで自動的に展開していくのだ。どこかの森だったのか、クレーター状に抉られた周りには枯れた木々が囲んでいる。ぶつちやけこのパソコン勝手に直ったり、スペックの異常な高さに気味悪い。

画面には被害面積、死亡者……次々に情報が出ては消えていく。

「見覚えがあるか？」

「俺が最後に覚えてる場所は確かに森だが、こんなところじゃねえよ」

「まあな……だが、残念ながらここなんだよな」

画像が切り替わり、動画になる。写っているのは三人の少年、見たところ全員共に日本人だろう。戦闘が行われているようだが、速過ぎたり理解不能な事象が起きたりと正直何が行われているか分からない。そして動画は二人の激突と共に終わりを告げた。

「有り得ん、人間の限界を軽く越えてるだろ」

「そりゃそうだ。少なくとも片方は神クラスだ」

「神？」

「そう、神だ。まあ人だし、ただのゲームの役職クラスみたいなものだ」
人だと聞いて少し安心したのは内緒だ。神なんてものが相手だったら、どう戦えばいいのかを考えてしまった。だが、同じ人ならまだ何とかなると思ってしまったのだ。

しかし、その安心はしてはいけないものだを知るのは鏡八のたった一言だった。

「だが、その持ちうる権能一つで冗談抜きで世界が潰れるぞ。実際に何度世界が壊され、人の知らぬところで直されていたことか」

嘆息しながら淡々と恐ろしいことを口にする。本当にそんなことが行われていたのに、誰も気付かないなんて……。

「なにせ、出来ないことの方が少ない」

こいつだ、と画面を指差すとまた切り替わりプロフィールのようなものと顔写真が現れた。典型的な日本人で黒目黒髪の瘦すく躯、名前イチヤマ通称イチチー。というか、名前書いてるんだったら通称を書く必要は無いのでは……？

「んっ？ こいつ、俺たちよりも十年弱だが早くこの世界に来てい

る!？」

履歴には確かにゲームに参加した年号が八年早く書かれている。それだけじゃない。神を殺した年も目を引かれるが、今までの経歴の中には世界を破壊したという項目が散見できた。能力は特秘事項扱いになっているが、『創造神：思考を現実に引き起こす』と箇条書きで書かれている。

「あと、相手の情報は……面倒、接触して思考をするだけで勝手に見えるから後は任した」

本当に面倒なのかパソコンを投げてよこす。手に取ると見た目に反して軽く、落としてしまいそうになる。というより、これはプレイヤーが勝手に見ていいものではないだろうに……。

動画の相手側を思い出すと、プロフィールが表示された。名前はユージ、黒目黒髪少し筋肉質な体躯たいく。……それにしても、趣味が料理というのは意外すぎる。というか、最高速度800m/秒って何!？」

「こいつ、人間か!? この速度で、体バラバラにならんのか。有り得ね……」

先に神様なんてものを見てしまったからだろうか。最初に驚きが出たが、すぐに冷静に思考することが出来た。

「まあ、残念ながらプレイヤーはゲーム内なら成長に果てが無い。無限に成長可能だ、才能にもよるがな」

鏡八は何でも無いように言うが、本当に興味がないのだろう。それはプレイヤーに等しく強くなる権利が与えられていることに他ならない。だが才能に左右されると言うならば、時間を掛ければ掛けるだけ他者との強さは明確なものになっていくことになるだろう。

「ねえ、そろそろ訊きいていいかしら?」

「どうした?」

今まで何も言わずにいたリンが口を挟んできた。画面に集中し過ぎていて気付かなかったが、見てみれば食事を終えたのだろう。何時の間にか窓から外を覗いていた。

「ここどこかしら？」

「そういや言つてなかったが、次の世界。正確に言えばお前たちが巻き込まれた森があった世界のだが」

ということは、気絶してる間にゲームがクリアされたということだろう。ゲームはクリアされると、強制的にプレイヤーは世界を移動させられる。自分でクリア出来なかったのは残念だが。

「前の世界はほぼ全域が森にしてあり、サバイバル能力を確かめるのが目標だったんだが。しかし、あれではあまり見れなかった。なにせ前の世界に来て三日でクリアだったからな、餓死者は百名もいなかった。それに、クリア条件を破壊系のものにしたのもいけなかった。対象物も巻き込まれて、すぐ終わりだ」

後悔しているのか、面白かったのか判断に困る声音だ。

話を聞いているのも飽きたので窓から外を見る。どこも変わらない普通の街。人々が賑やかに買い物をしていたり雑談していたり、楽しい風景。そして、その中にある異物。

「コロシアム……？」

想像が容易に出来るような円柱型の闘技場。ここから遠くにあるというのに、巨大な闘技場の凝った意匠がここからでもよく見取れる。

「そう、今回の趣旨は殺し合い」

本当に楽しそうに鏡八は歪んだ笑顔を浮かべた。

闘技場（前書き）

久しぶりの投稿です。

因みに、小説のお気に入り登録してくださった読者さんが一人おりましていたく喜びました。

まあ、二人の内一人は知人なのですが……。

闘技場

鏡八との会話の後、宿を出て俺達は店を冷やかしつつ闘技場へと足を向けていた。鏡八とは宿で別れたのだが何かすることがあるらしく、フードを深く被り直して行った。何時殺されそうになってもおかしくないほどのこと。デスゲームに無理矢理参加させた

張本人なのだ。その辺を歩くだけでも危険だと思う。神経が太いか、単に死なない自信があるのかどちらにしても大したものである。思考を断ち闘技場に目を向けるが、やはり異様なのはその大きさだろう。近付けば近付くほどその大きさに圧倒される。高さ、直径共に一キロは下らないだろう。豪華な外壁を見ていると、中もきつと凄いのだろうと思わせるが。

「こんなところで戦いたくないぜ。金で戦うのも、気のまま戦うのもいいが見世物にはされたくねえな」

「同意だわ。戦いなんて自分の為か大切な人を守るだけで充分よ」
取り敢えず、ここで戦うことなんてないだろう。俺もリンもやる気がないのだし、わざわざ参加する必要はないはずだ。それに、まだ怪我は完治していないのだ。

参加しない場合、ゲームのクリアは他の人に譲ることになるだろう。こんなに大きく目立つものなら、クリア条件もここに関連するものだろうからな。

「前回に引き続き、今回もクリアならずか」

「そうね、でもいいんじゃないかしら。クリアする為に戦っている訳ではないでしょう?」

リンも俺と同じ結論に達したのか、同意を示している。それに言っていることは正しい。クリアする為に戦う訳ではなく、生きるために刃を向ける。それがリンの刀を握る理由なのだろう。

俺はどうなんだろうな? 何の為に武器を手取るのか。

「カズヤ怖い顔してるわよ」

顔に手を当ててみるが、俺の口は楽しそうに歪んでいて溜め息が僅かに漏れる。人を殺すのが楽しくて戦っているのだろうか、と考えてしまう。実際その可能性も否定できないのが現状だ。殺すことへの快楽を求めて戦っているプレイヤーはたくさんいる。俺もその中の一人ではないのかもしれない。

「どうする、見物に行くか？」

「殺し合いを見て楽しいの？」

リンは呆れた、と言うように頭を振る。リンの性格を考えればこうなることは予想できたはずなのに、配慮が足りなかったと反省する。だが、気になるのだ。参加するかは分からないが、先程見た三人分のデータが脳裏を過ぎる。

「じゃあ、後で一人で行ってみますか？」

「行きたいならそうするといいわ」

リンは別行動を取るようで、一人で人込みの中へ消えていった。

闘技場に入ると、観客席が見えたので行ってみた。どうやら収容できる人数は相当に多いようで、八割がた埋まっているが空きがある。空いていた席に座り込み、足を組んで待つこと十分程。

「ようこそ、殺し合いの場合へ」

闘技場内の静けさは耳が痛いほどであった。その一言に問題があった訳でも倫理的に問題があるが、今は置いておく、トラブルが発生した訳でもない。静けさの原因は驚愕と殺意と憎悪に収束されるだろう。

「おいおい……あいつは馬鹿か」

思わず言葉が漏れる。漏れてしまう。闘技場に唐突に現れ、一言を言ったのは鏡八であった。闘技場の正面に、バルコニー状に開

けた空間で一人だけ椅子で寛いでる。

このゲームにおいて、一番殺したい人に挙げられても仕方が無い程の人物なのだ。友人、家族、恋人、大切な人をこのデスゲームで無くした人は少なくない。そして、この状況を作り出したのは鏡八なのだ。原因は俺にあるのだが。よくも、のうのと出てこれると誰もが感じているだろう。

「ん？ どうした、やけに静かだな。俺が殺したいか？」

当たり前だ、と隣から言葉が漏れてきた。この会場には、同じ気持ちの者たちが大量に存在しているだろう。空気が気持ち悪い程、淀んでいるのが肌で感じられる。

「そうだな、このまま戦うのは面白くないな。優勝者には俺と戦う権利をくれてやるってのはどうだ？」

ついでにこれをくれてやろう」

周りからふざけるな、という声がいくつかが上がった。普通に考えて、ここで皆で袋叩きにしてしまえばいいのだ。誰もそんな茶番に付き合う必要がないことを理解している。

だが、鏡八が懐から取り出した小瓶が気になる。中には液体がほんの数滴入ってるだけだ。何に使えるのだろうか？

「死ね！！」

思考を遮るように、ここから遠い席で自身を叱咤するように大声を上げ何かを投げた人が見えた。手榴弾の類なのだろうか、意外に強い筋力で鏡八の近くまで行き 爆発した！！

煙が巻き上がり、皆が固唾を飲んで見守る気配が闘技場を包む。

そして、煙が晴れ

「無駄なことをする……。いくらやっても時間の無駄だ」

鏡八はうんざりとした表情で腰掛けたままだ。傷一つ付いてないように思える。

「成る程、戦う権利欲しさに戦わせる。自身を賭けにするか……。思い切りがいいな」

どうやって身を守ったのかは不明だが、無傷なのを見てしまえば

攻撃に意味はないように思える。

しかし、これでは鏡八を殺したいと願ったら戦って勝ち抜くしかないのだ。面白いことになりそうだと思いつつ、会場を後にする。

「開催は三日後だ。存分に備えたまえ」

後ろから小さくなった鏡八の声が聞こえてくる。闘技場には、ただ憎悪と殺意が渦巻いていた。

一日目

闘技場のルールは分かりやすいが、その分抑制も少なくリスクー
な戦いを予想させるものであった。

一つ目、勝敗は降参こうさんを認めさせるか殺せば勝ち。確かに……非常
に分かりやすいのだが、言ってることは一歩間違えば死んでしまう
ということだ。生死問わずなのは鏡八らしい考えだ。

二つ目、一パーティー五名までの団体戦にするというもの。俺は
リンを無理矢理説き伏せるような形で参加を取り付けた。よって二
人で戦闘することとなるが、苦戦することは予想される。一人で戦闘
をするよりは幾分いくぶんマシなのかもしれないが。

三つ目、試合前の妨害、その他行為を認めるというもの。その他
と曖昧あいまいな表現になっているが、多くのプレイヤーが戦闘不能状態に
追い込むことも可とだと捉とらえている。詰つまり、試合前に相手を潰す事
が実質可能になってしまっているのだ。

それらが主だったルールの内容で、発表されたのが一日目。ギス
ギスした街の雰囲気、三日間も過ごさねばならないというのは精
神的に辛いものがある。リンはそうでもないみたいではあるけれど。
「俺には無理だつて、あんな雰囲気……」

そういうことなので、俺は誰もいなさそうな街の少し外れたとこ
ろにある森に来ていた。綺麗に透き通る川が流れ、魚もいるのでは
ないだろうか。日が当たらない木陰に横たわり、何を見るでもなく
空を見上げる。眠るには最高の気温のはずなのだが、眠気は襲襲つて
こない。元々のんびりするの好きな方だが、昼寝はあまり好きな
方ではないのだ。

仕方なく、過去を少しだけ振り返ってみる。このゲームに参加し
た日、そしてリンとの出会いなど懐かしいことばかりだ。まだ、数
年しか経っていないはずだがひどく遠くに感じる。それらも、最早
過去のことになってしまったということなのだろうか？

「……ん？」

思考を中断する。近くで人の気配がした気がしたのだが、何もいないのだ。戦いを控えた前だから、気を張りすぎているのだろうか？目を閉じて耳を澄ませば、遠くから足音が近付いてきているのが分かる。歩幅が大きくないのか、急いで歩いているのか土を踏む感覚は短い。先程感じた気配はこいつなのだろうか？

しかし、距離が離れているようでどこか遠くから聞こえる。

「あれえ、こんなところに人がいる」。殺しちゃおうか、くくく」

「!？」

いきなりの声に、慌てて飛び起きる。つい先程まで誰もいなかったはずなのに、湧き出るようにすぐ近くに人がいたのだ。

暗闇を思わせる髪に、思考が読み取れず光を全く反射しない黒色の瞳。黒いローブのようなものを羽織り、全体的に暗いイメージで奇妙な雰囲気を持つ少女だった。俺よりも少し年下で、十四歳くらいだろう。喜悦を湛^{たた}えた表情だが、どこか歪みを含んでいるのが見て取れる。一言で言うなら

「壊れてるやがる」

「あれえ、壊れてるなんて言った？ 失礼だなあ」

表情は笑ったままだが、あれは典型的な精神的に壊れた者のいい例だ。心を壊すほどのショックを受けたか、人を殺すのが楽しくて止められなくなってしまった者に傾向がある。或いは、両方なのか……。

厄介なことに、この手の相手は異常に強い。精神を壊しているため痛みを恐れないし、何より強さを正確に測るのが難しい。表情に意味がないせいだ。人間、目を見るだけで相手の考えていることが分かるというのは有名な話だが、この少女のように終始笑顔では思考が読み取れない。

戦うのはかなりマズイ気がした。いや、気なんてものではない。プレイヤーが感じる危険は、決して気などと曖昧^{あいまい}なもので済ましていいものではない。死ぬ可能性は限りなく高い。

理解しているからこそ、少しずつ後退する。

「……」

「あれえ、どこ行くのかな？ 逃がさないよ、死んでね」

どうやら、見逃す気は更々（さらさら）ないようで楽しそうに懐を探り始める。何を出すのか見極めて、初撃を防ぐなり避けてから逃げる決意をする。無防備な背中を晒すほど、俺も間抜けではないということだ。

「ふふふ……」

楽しそうに取り出したのは、実用性を損なわない程度に装飾された短剣だった。少々使い込まれている感があるが、特徴も装飾以外これといったものがなく切れ味が良いこともなさそうだ。それを手で弄び、唐突に投げてきた。

「ちっ！」

これだから壊れてる奴は嫌だ。事前動作も雰囲気もなく、何の脈絡も無く行動する。攻撃が来るのが認識出来ず、対応がほんの僅かに遅れてしまうのだ。

しかし、速さ自体はそれ程のものでもない。横に避けるだけで、楽に避けられるはず

ザクツッ！！

「えっ？」

俺は呆然として、ついそんな眩きを漏らしつつ左肩を見る。確かに避けたはずなのだが、何時の間にか先程の短剣が肩に深く刺さっていた。間違いなく短剣は俺の横を通り過ぎ、後方に飛んでいったはずなのに……納得は出来ないが、現状の理解と共に痛みを発し始める。冷たい鉄の温度と熱い鈍痛が神経を逆撫でる。

「くそっ！！」

能力を使用したように思えるが、幾つか候補を頭の中で思い浮かべるが断定は出来ない。

しかし、それについて思考するのは無意味だ。根拠が足りないし、何より対処が出来なければ分かったところで意味が無い。

「ふふ……」

何の前触れも無く、大きな岩が頭上から降ってくる！！

「ちよ」

横に転がるようにギリギリ回避するが、その先にも降り注ぐ！！

それを避けるが、その先にも　！！

「はあ……はあ……」

何十回にも及ぶ攻撃を繰り返して飽きたのか、少女は攻撃を止めた。しかし、何を考えているのかその思考は全く読み取れない。

「飽きちゃた、バイバイ」

「くそ、やっぱり転移系ワープの能力だったか！！」

今更推論が当たったことを気付いても手遅れだった。何故なら、俺は地上百メートルくらいの空中に放り出されていた。人間、残念なことに空を飛べるようには設計されてはいない。

「ああ、困ったな……どうしよう？」

急速に落下していく中、俺は逆に冷静に思考していた。恐怖のせいで、脳が正常に作用しないのだろうか？

もう地面はすぐそこまで迫っている！！

「いや、でも洒落ししゃれに　！？」

「止まれ」

不思議なことに、俺は空中で止まっていた。たった、一言の言葉で指一本動かすことすら出来ず目を見開く。

「誰……？」

少女が草むらから出てきた少年に問いかける。先程までの笑顔と

は打って変わって、冷静に思考しているように見える。首も動かず、碌ろくに視点をずらす事すら出来ないため横目で少年を見る。

「馬鹿な……何故ここに……」

黒目黒髪の少年、無表情でその瞳は俺たちを全く認識してないと言わんばかりの無関心。瘦すく躯くで、およそ旅には向かない軽装。間違はなく、資料で見た通り創造神であるイチヤマー！

少女とイチヤマは視線を交わしつつ、その場を動かない。そして三分ほど睨にらみ合ったあと

「飽きた……」

少女は一言いちげん呟くと、そのまま虚空に溶けるように姿を消した。

「がふっー!!」

すると、硬直していた体は動き出し地面に激突した。落下していた途中だったので、頭からぶつかった。百メートルくらいの高さから落ちるよりはまだいいのかもしれないが、頭からぶつかったのは痛かった。

「えっと……ありがとう」

取り敢あえず、感謝の言葉を述べてみる。イチヤマは黙ったまま俺を見てくる。そこに何かを探すかのよう。

「……どういたしまして。だが、まだまだだな。あんな小物にも勝てないとは」

イチヤマは永遠にも思えた無言を止め、ほんの少し口の端を歪ませつつ言葉を紡いだ。いきなり本当のことを突きつけられたが、事実手も足も出なかった現状では言い返せない。まあ、本気なら手くらはい出せたかもしれないが……。

「まあいい、もっと強くなって俺を楽しませろ。お前は面白いやつになりそうだ」

終始無表情だったイチヤマが今だけは笑っていた。しかし、それは友好的なものではなく獠とう猛めうな笑み、狩りの獲物に対するような肉食獣の目。強くなりすぎた故に、対等に戦うものすらいない場所で彼はきつと待っているのだろう。自分と同等の力をつけた者と戦う

日を。

そして、彼も唐突に消えた。

「……そんなこと言われても困るんだが。なにせ、俺残念ながらプレイヤーの中じゃ中の下行きゃいい方だし」

俺の本音と弱音を混ぜた吐露は静かに森に消えた。

二日目（前書き）

お待たせいたしました（誰も待ってないと思うけど）。

ガーベラさんが『更新してよ』と言ってきたものですから、今日は久しぶりに投稿したいと思います。

昨日の反省を生かして　というわけでもないのだが、今日は街の中で過ごすことにした。ギスギスした空気は相変わらずだが、昨日どうやら先手必勝とばかりに奇襲をしたところを振り返り討ちにあった事件が起こったらしく、皆相手を見定める内は潰しにかかるのを自重しているようだ。

詰まりは、潰すこと自体は諦めていないのだろう。しかし、今日しか猶予もないわけで何事も無いのを祈るだけだ。

「うわあ……こりや悲惨だな」

その事件が起きたという場所を訪れたのだが、裏道の一区画が完全に溶けていた。振り返り討ちになった者は死んでしまったと聞いたが無理もない。チョコレートでも溶かすかのように壁はどろりと垂れ、近くにあったものは元の形を判別するのも不可能なほどの燃え滓かすになっっている。人間が耐えられる程の火力ではない。だが、襲われた人物が火を操る能力であることは間違いないさそうだ。

背後を窺うかがえば、人がちらほら見てとれる。人気の少ない時間を狙って来てみたのだが、やはりいるものだ。長居すれば俺も襲われかねない場所だ。早目に切り上げるのが賢明だろう。

「……いや、もう遅かったか」

背後は見えないが、複数足音が聞こえてくる。出来る限り音を消しているようだが、ほんの少し擦れる音がする。意識しなければ軽いゴミが地面を擦るようにも聞こえるが、人間らしい音の間隔がそれを否定している。

非常にマズイ事態である。戦闘になったら複数人相手に余裕で勝てる程俺は強くない。ぶつちゃけ、殺される可能性も有り得る。

「3……2……1……行くか」

振り向かず前へひたすら走る。相手が人ではないという可能性に一縷いちろうの望みを賭けてみるが、その思いも虚しく後方から舌打ちと

走り出す音が聞こえる。因みに、数を数えたのはやる気の無い体に発破を掛けるためのもので深い意味は無い。

「ちっ……逃げすと面倒だ。殺すぞ」

リーダー格なのか一人の男の声が押し殺すように言葉を発した。それに同意するように、頷く気配が二つ。都合、三人に追われていることになるのだろう。男が本当に殺気を放つことに驚いたものの、俺としては面倒にしか思えなかった。

「あゝあ、イツチーのように楽に倒せりや苦労せんのだがなあ……」
愚痴りつつも速度は落ちない。まあ、落としたら殺されるわけで落とせないんだが……。

いくつ角を曲がっただろうか、突如視界が開けた場所に出て日の眩しさに思わず目を細める。振り返れば、陰で薄暗い裏通りから男が三人ほど曲がってくるのが見えた。表立って行動する可能性は低そうだが、念のため出店に紛れて身を隠そうと適当な店に入る。

「ラーメン？」

実に適当な選択だった。しかし、店内は見渡し難い構造になっていて、逆に良かったかもしれないと思いつき直しカウンターに腰掛けるメニューを見れば、普通のものから創作料理に至るまでの色んな料理が載っている。それも、ラーメンに限らずハンバーグなどの洋食から和食に中華などの多岐にわたる。

「凄いな、これは……」

思わず感嘆の言葉を漏らしてしまう。メニューの内容も見てて凄い、それ以上に厨房の方を見てみるが一人しか居ないのだ。詰まり、たった一人で全ての注文を捌さばいているのだろう。というか、もしかしたらここはラーメン屋ではないのかもしれない。厨房でラーメンを煮ていたからそうだと思ったが、客を見れば色んなものを注文している。

一体どんな奴が料理しているのかと気になったが、ここからでは背後にあたるので色素の薄い茶色の髪を肩口辺りまで伸ばしている少年であることくらいしか分からない。

「おお、来てたんだな。ここの飯は美味いぞ」

「鏡…… Kか。お前と外食なんて久しぶりだな」

声を掛けられ振り向けば、そこにはフードを目深に被り手袋をして全身覆うような鏡八の姿があった。流石に、人前で鏡八と呼ぶ訳にもいかないのがKと呼んだ。隣の椅子を引いて座りつつ、とんこつラーメン二つなどと俺の分まで勝手に注文し始めた。

「何時も思うが暑そうな格好だな」

「仕方ないだろ、これでも着なきや出歩けねえし。てか、あれはお前の連れか？」

「どれが？ と思いつつ、指差された方向を見ると静かに殺気を含んでいる男の姿があった。ローブで顔を隠しているが、隠し切れないう口元には髭ひげと獐猛ひげな笑みが浮かんでいる。

「来い」

俺の腕を掴み、立たせようとする。抗うより、途中何らかの方法で切り抜けるほうがいいだろう。店なら襲ってこないと思っただが、甘かったようだ。

「ラーメン一丁あがり」

席に茹でたての食欲をそそるラーメンを置きつつ、立とうとした俺を抑えて男の前に少年が立つ。鏡八は美味そうに食べるばかりで興味はないようだ。戦うことを肯定している節のある鏡八が、何も言わないのは珍しい。

「邪魔だ、ガキ」

「あん？ そりゃ俺に言ったのか、ザコ」

少年は口悪く言い放つ。こんな小物に絶対に負けるわけがないという傲岸不遜な雰囲気きょうあんふそんが少年から発せられていたが、それに気付いてか気付かぬか男は視線を少年へと移した。

「死ね」

「バンツッ！」と、銃声が店内に鳴り響く。店内が静まり返り、何事かと皆振り向く中で発するのは鏡八が汁を啜すする音だけ。少年は微動みどうだにしない。

男の手に握られていたのは黒光りする拳銃だ。このゲームで銃を使うものは少なくない。いや、多いとすら言えるだろう。能力にも頼らず剣すら握らず自分の手を汚さず殺せる、比較的安全圏内からの攻撃が可能といった要素が大きいためだ。

「御馳走さん。まあ、なんだ。ご愁傷さん？」

「何を言ってるやがる。フード野郎」

鏡八の言葉に訝しむのも無理は無いだろう。一メートルと離れていない距離から放たれた銃弾が外れることなど有り得ない。命中したはずだ。

「死にたくなかったら、早めに切り上げた方がいいんじゃないか？」

まあ、俺には関係ないがな」

「どういう」

男が言い終わるよりも早く、後頭部を掴む手があった。今まで目の前にいたはずの少年が欠伸を噛み殺しつつ、今にも握り潰さんばかりに力んでいる。男の目は本気で命の危険を感じていて、口からは今にも絶叫が迸りそうなのだが、抑えられた力が強すぎて口をほとんど開けられないでいる。

「や、め」

ぐちゃり、とトマトでも潰すかのように呆気なく頭を割られた。ゆっくり崩れ落ちる向こうで、少年は唾っていた。返り血を浴びたその表情には、侮蔑さえ浮かんでいる。

それを見た客たちと男の連れ　　そっいや、こいつらもいたなは我先にと出ていく。店内に残されたのは俺と鏡八と少年だけだった。

「ラーメンは美味しいかい？」

「……取り敢えず、美味しそうだったとは言っておく」

ラーメンには飛び散った血や脳の一部が浮かんでいる。湯気が立ち昇る器には到底口を付ける気にはならなかった。

「ふむ、また作り直さないかね」

面倒だと言外に呟きつつ、軽くフィンガースナップをする。それ

だけで男の体からは炎が吹き出し、あつと言つ間に焼き尽くしてしまふ。ほんの二、三秒の間に人を塵ちり一つ残さず燃やすなんてどれほどの火力が必要なのだろうか？

「ユージ君、俺もお替わり」

「えっ！？ あれがユージなのか！！」

驚いた。画像で見えていた容姿と似ている気がしてはいたが、まさかこんな所で料理なんて作っているとは思ひもしなかった。ゲーム内最強候補が悠長に今ラーメン煮てんだぜ？

「それよりも、さっきの攻撃当たってなかったのか？」

「ああ、銃弾か。筋肉で防いだか、避けたんじゃないかねえの？」

んな、無茶な……銃弾が効かない筋肉って、どんだけ硬けりやいのさ。回避したと信じたいが、したとしても速過ぎるしどっちも人間技じゃねえ。

「はい、とんこつラーメン。お待たせ」

柔和な笑顔で置いたユージを真正面から見る。黒目に色素の薄い茶髪に近い黒髪、先程とは違い優しそうな面持ちで口調も優しい。とても男に向けた言葉が信じられないくらいの変わりようだ。

「鏡八、ユージ君は二重人格か？」

「似たもんかな。戦闘中は口が悪い、それ以外は温厚な性格だ」

先程は驚きのあまり呼び捨てにしてしまったが、落ち着いた今呼び捨てにする気は湧かなかった。鏡八の語る言葉は少なかったが、昔からの交流があるのか口元は楽しげに笑ってる。何時もの歪んだ嗤いではなく、本当の笑顔で。

それを横目に見ながらラーメンを啜すするが、とても美味しかった。今まで食べた中で一番美味しかったかも、と思えるほどの味だった。「そう言えば鏡八、君自身を賭けにした理由は何なんだい？」

食器を洗いつつ、ユージは尋ねる。そこは俺としても気になっていたことだ。わざわざ自分を賭けなくたって、業物わざものの武器にするもよし、能力をくれてやるもよし。ただ鏡八への殺意と憎悪で周りが見えなくなっている者が多過ぎるだけで、冷静に客観視すれば誰だ

っておかしいと気付くはずなのだ。

「暇潰しだ。それと、今殺されると困るのでね」

成る程、と頷いてユージは食器を置く。しかし、言っていることが俺には意味が分からなかった。殺されると困る？ それなら、自身を賭けにするのは矛盾している。

「さてと、そろそろ店仕舞い^{みせじま}かな。明日は戦わないといけないしね」

「ご馳走^{ごちそう}さん。ということは、タツキも出張^{出張}ってくるのか。はあ…

…一チーム^{ひと}くらいにして欲しいものだ。なにせ、あいつんとこの勢力は三万人近いからな」

「大丈夫、明日は僕とタツキくらいしか出ないよ。カズヤ、君も明日は出るのかい？」

「ああ、出るよ。流石にユージ君、君には勝てそうにないな」

奇妙な違和感を感じつつも、席を立ち外に向かう。再び人が賑わ^{にぎ}う喧騒に目をしかめつつ、明日は戦わないといけないのだから早目に宿に戻ろうと思いつつ足を早めた。

二日目（後書き）

フィンガースナップ……指パッチンのこと

分からない方もいるかと思うので……（特にガーベラさん！）。
因みに、作者は知らなかった！！

三日月……の、ちょっとその前に

薄暗い藍色にも似た夜空に輝く三日月と星々が燦々（さんさん）と架かっている。心地よい静寂に聞こえるは、流れる水の音ばかり。辺りは温めの湯で満たされ、ゆらゆらと水面に写った月を揺らしている。風が頬を撫でるが、涼しい風は湿気を帯びて少し生ぬるい。「ふう……やっぱり温泉は気持ちいいぜ」「だな」

鏡八が言葉短に同意を示す。俺たちは露天温泉に浸かっているのだ。この宿の風呂はとても気持ちがいいのだ。サウナに電気風呂、露天風呂など、他にもたくさん風呂を備えており、鏡八自身がゲームを少々弄ってこの宿を作ったために客は俺とリンと鏡八だけしかいない。

「ふう……しかし、明日か」
「なんだ、怖気付いたか？ 別に、棄権するのでもいいんだぜ？」

軽く嘲笑するように鏡八は笑いながら湯を掬い弄ぶ。挑発をされているように見えないが、いや、実際にしてるのだが、本気で言ってるわけでもない。結局、こいつにとって俺の選択など何を選んでも構わないのだ。

「そついや、カズヤあれまだ使わないのか？」
「あれか？ 当分使う気ないぞ」

「まったく、つまらん。……次は使うといいな」
俺が面白いから、と付け加えて立ち上がる。湯が傷だらけの体を滴り流れ落ちる。水も滴るいい男とは言うものだが、同じ男である以上吐き気しか催さんわ……。

そのまま他の風呂に向かうようで、露天風呂を出てどこかへと消えていく。

「へくしっ！！ うう、俺も上がるかな……風邪引きそうだし」
長く浸かるためなのか、温めだし湯が腹の少し上くらいまでの半

身浴なのだ。長く入り続けると風邪を引いてしまいそうになる。

立ち上がり、脱衣所に向けて足を進め

「……何故ここに？」

「鏡八が酒持って行けって言ったのよ」

リンが酒を持ってそこにいたのだ。ちゃんとバスタオルは巻いてるけど、シミ一つ無い体は目のやり場に困る。美術品のような均整のとれた体つき、女性らしい丸みを帯びたシルエツト。ふくよかな胸に細い腰周り、そして普段はポニーテールにしている長い髪を下ろしている。

この宿の風呂は男女混浴なんだよな。いくら俺とリンと鏡八しかないし、男女分けるの面倒だからって省はぶいていい手間ではなからうに。

「なんか、別人みたいだな」

「どういう意味よ」

軽く睨にらむようにじっとこちらを見つめてくる。しかし、髪を下ろすだけでも印象はがらっと変わるものだ。元々美人だが、髪を下ろしたのも大人っぽい色香があっという間なものだな。

折角持ってきてもらったものだ。酒を受け取り、もう一度湯に浸かり直す。

「綺麗な夜ね」

俺は何も言わずに杯を少し傾ける。確かに、月も綺麗だし星も夜空に散りばめられた宝石の輝きのようだ。しかしながら、リンの美しさもまるで引けを取らない。

「カズヤ、私と会った時のこと憶おぼえてる？」

「あー……憶おぼえてる」

「あの約束も？」

リンはこちらを見ず、膝を抱えぼつりと言った。俺とリンが初めて交わした約束。それは、今も尚なほリンの心の中にあるだろう。

俺は何も答えず、ただ杯を傾け遠い過去に思いを馳はせる。

リンと初めて会ったのは、ゲームに来てから三日目のことだった。歩き出した何も無い草原を、ただひたすらに歩き続けた。動物どころか、モンスターもない草原。それは俺が生きていられた奇跡だが、引き換えに食料もない生活を強いた。草は毒素を含んでいるのか、食べてみたが一日目は酷いことになった。

誰も居ない、食料も無い。件の虐めが尾を引き、生への執着が薄い俺にはそれ以上動く気力がどうしても湧かなかった。どうせ俺という存在がなくなっただけで、世界には何も影響しない。鏡八との出会いで幾分か薄れていた思考が、俺の気力を根こそぎ奪いつくした瞬間だった。

「……………死ぬのか？」

倒れこんだ瞳に写る空はどこまでも蒼く、山々は悠然としていて美しかった。芸術を愛でる心でもあればその景観に感動したであろうが、自己の存在にすら興味の薄い俺には何も感じなかった。そして、己がどのようなことになるのかすらどうでもよかった。

ゆっくりと目を閉じて、意識が闇に刈り取られていくように深く眠った。

次に目が覚めたのは、温かさに満ち溢れた部屋だった。知らない部屋だが、どこか安心感のある部屋で、調度品が控えめに置かれた部屋は清潔感がある。

「どこだ……………どこ？」

心中に去来する虚無感を感じつつ虚ろに呟く。それは声になつたのか、それとも口の中で途絶えてしまつたか分からなかつた。

上体を起こし、周りを見渡すが誰もいない。家主はどこぞへ消えたか知る由もないが、きつと遠くには行つてない気がした。ベッドを降り、空腹を少し感じたが無視しそのまま外へ。

そこに広がるのは気を失う前と変わらぬ空と、見果てぬ草原だけ。「どうして……」

違ふのは、今が夜であることと一人の少女が泣いていたことだ。

呟きは少女の口から漏れたものだった。俺には気付いてないらしく、視線は地に落とされたままだ。翡翠色の瞳は涙に濡れ、緑色の長いポニーテールの先端が地面に付くのも気にせず座っていた。これが俺とリンとの出会いだつた。

「何故、泣いてるんだ？」

少女ははつとしたように涙を拭い顔を上げた。とても美しい少女だと思つたのは今でも覚えている。整つたような顔立ち、線の細い体も精緻な作り物のようだ。しかし、そんなことを抜きにしても泣いている涙がとても純粹で綺麗だつた。

「良かつた、気が付いたの」

「そんなことより、何故泣いてるんだ？」

とても失礼な態度だつたと今でも思う。他人である俺の心配をしなくていいというのに、俺は礼もなく問いただそうとしているのだ。何故か分からないが、聞いておかないといけないと思つたのだ。しかし、少女はそんな俺の態度を許してくれた。

「……少し前のことなんだけどね、妹が攫われてしまったの」

少女は時々悲しみに瞳を揺らし、泣き、嗚咽を漏らしながらも語ってくれた。とても長い時間を掛けてゆっくりと全てを。終わる頃には夜も明け、空が白み始めた頃だつた。

要約すると、妹というのは義妹なのだそうだ。長い間この草原で二人で暮らしていたが、妹は何者かに追われていたらしい。そして何者かが現れ、妹を連れ去ろうとしたそうだ。少女は妹を守るため、

刀を手に戦つたらしい。技量では決して劣ることはなく、とはいえ勝負は互角だつたらしい。しかし、その何者かは奇妙な道具を用いてこの世界から姿を消したらしい。

妹はその時に攫われた。しかし、プレイヤーではないリンには世界を移動する権利がない。

「そうか……だが世界を越えればいいんだろう?」

「無理よ、私は世界を移動する権利がないもの」

その時の俺には世界を越えるという意味を理解していなかった。プレイヤーにしか越えることが出来ないことなど知らない。それに、自らの存在に興味がない俺には他人に気遣う意思など生まれるはずがない。

だが

「行こう、世界を越える方法は必ず見つける。ここにいっても何も変わらない」

「どうして……私の為にそこまでしようとおあなたは言うの?」

少女の言っていることは正しい。見ず知らずの他人の言うことを信用するのは難しい。俺はここで断られるなら、それはそれでいいくらいにしか思っていなかった。

しかし、おかしな話だ。自己に興味の薄い俺が、わざわざ他者の願いを叶えようとしたのだから。そう思い、記憶を探り答えを探してみる。

「多分……俺の親友が言つてたからだ。美少女のお願いは聞くものださ」

「ふふ、面白い親友さんね」

「笑わせる為に言つたわけではないのだが」

首を傾げると、また少女は笑つた。しかし、言つたとおり親友が言つた通りに動いただけだ。何故か、親友の姿は思い浮かばなかったが。今思えば、自我の薄くなつていた頃の他者の言葉がこれ程までに強かつたというのは恐ろしいことだ。

「そうね、連れてつてくれる?」

「ああ……しかし、非常に困ったことがあるんだ」

「どうしたの？」

「腹が減った。出来れば、何か食べさせて欲しい」

くすつと笑ってリンは笑ってくれた。思えば、あれが初めての笑顔だった。

夜風は少しずつ涼しさを増して頬を撫でる。湯けむりが視界を薄く遮り、水の流れる音ばかりが耳に付く。

「時々思うの。まだ生きているのかな、って」

誰とは言わないが、二人とも攫われた妹のことだと分かっている。リンの言いたいことは分かる。不安、焦燥、願望、色々な感情が過ぎっては消えていく。そんな不安定な心情なんだろう。

残念ながら、未だに妹は見つかっていない。生きているのかすら確かめられていないのが現状だ。

「生きてるよ」

「どうして、そんなことが言えるの……。私たちには確かめる手段はないわ」

リンの顔は今にも泣きそうな程に歪んでいる。どうしてそう思ったのかは分からないが、それを見ているのが俺はとても辛かった。

「大丈夫、生きてる。俺は確約できないことは言わない」

そう、と言ってリンは少しだけ安堵の涙を流した。

闘技場にて（前書き）

また期間を置いてしまいました。

お待ちの方、面目ない。

今回は夏休みの宿題に終わっていたとか、その他多数の事情により遅れました。

もうそろそろ、更新しないと流石にヤバイんで。

闘技場にて

三日目の闘技場は開幕から死人が出るという過酷かしくなものであった。このゲームで人を殺すことを躊躇ためらわない人は多い。誰にも罰せられることもない。寧ろ鏡八が初めてプレイヤーたちの前に現れ言った言葉、『君達が誰を殺し、欺ごまかき、生かすかは自由だ』という言葉がそれを肯定しているようにも思える。

だが、それを差し引いても最初の試合は酷かった。

「さて、一回戦目だが」

闘技場に集結した人々が、鏡八の言葉を一言たりとも聞き逃すことのないように静寂を保っている。皆戦意を高め、十分な準備を行いこの日に臨そんでいるのだ。そして、今まさに一回戦目の戦いが選ばれるのだ。

「こいつらの試合だ」

鏡八は、ぞんざいに言う。すると、闘技場の壁面や自分の席の前など多数の場所にモニターが出現した。それには一回戦目の出場者が出ている。かなり多く、一人人は下らないのではないかとという程の名前が黄色で列挙してある。多すぎて自分の名前があるか探すのが一苦労だが、見たところ俺の名前はなかった。

それを見ていると、次々と席を後にしていく者たちがいた。多分リストアップされた者たちなのだろう。入口の近くにあったどこへ続いているかも分からぬ階段を下っていく。それ以上先はここからでは見えないが、戦いに赴おもむくのだろう。

「この闘技場は全員で戦うには狭すぎる。一組みだけここで戦って

もらおう。なに、流れ弾に当たるような柔^{やわ}な作りはしていないから安心したまえ。まあ、他の選抜者たちには別の場所で戦ってもらうがな」

「どうやら一組みだけこの闘技場で戦わせ、他の一回戦目で呼ばれた者たちは地下かどこかで戦わせるのだろう。確かに、この人数を戦わせていたら時間がいくつあっても足りるものではないだろう。」

「最初からこれでは面白みに欠けるな」

一回戦目の試合を見て興味を失せたかのように頼杖を付く。今にも溜め息をつかんばかりに呆れた様子だ。その様子を見るに自分で決めたものではなく、ランダムに決めたものなのだろう。

鏡八が興味を失せる試合が気になる。多分闘技場で戦う者たちのはずだが。

「なるほど、こりゃ失せるかもな。だが、俺にとっては初めて生で見れるいい機会だ」

自分でも分かるくらいに、口元に笑みが浮かぶ。鏡八が興味を失せるのも無理はないかもしれない。モニターにはイッチー 本名はイチャマのはずだが、何故かイッチーと書かれていた ともう一つ対戦者の名前が書かれている。

顔を上げると、何時の間にか闘技場にはイッチーと何時ぞやの少女がいた。二人の間には敵意も殺意も戦意すらほとんど無かった。

「また合ったね、お兄ちゃん。今日は死んでね」

壊れた表情で笑みを浮かべる少女は二日前と同じ黒い格好をしており、表情は常に笑み以外を浮かべない。それに対してイッチーは無表情で構えもなく気負いもない。努めて平常心を保っているのではなく、心を揺るがすものがないのだ。

「お前に俺が殺せるか？」

ITCHーの問いは当然とも言えるものだった。神格を得、思考を現実に引き起こすことすら難しくない彼を殺せるわけがない。しかし、彼の言ったことは問いではなく、さりとして見下しているわけでもない。俺にはそれが願望や希望に聞こえた。

少女はその問いに答えず、懐から短剣を取り出した。そして、それを淡々と投げる。

「……」

ITCHーは微動だにせず、一瞥いちべつをくれる。ただそれだけで、短剣は砂で作られていたかのように塵に変わった。少女はそれを見て驚きをほんの少し表情に過ぎよらせるが、未だにその表情は笑みのままだ。

「じゃあ、これは？」

「心臓……が」

一見しても何が起きているか分からない。だが、少女の手の中には一つのものがあった。人間にはなくてはならないもの、心臓。無論それが少女のものではなく、ITCHーのものであることは容易に想像できる。しかし、青ざめた顔色をするITCHーからは焦燥も危機感も窺うかがえない。

「バイバイ、これなら死ねるよね」

そのまま手を振りながら能力を発動させ、一瞬のうちにITCHーを空中に放る。そのまま重力に従い、ITCHーの体は地面に叩きつけられた。体は骨という骨が折れ、いたるところが曲がり、脳も幾分かはみ出していた。遠目に見ても死んでいるようにしか見えない。「ふふ、ばいばいお兄ちゃん」

そのまま少女は去ろうとして、後ろを向き歩を進める。百人が百人ともITCHーは死んでいる、と言っただろうから仕方がない。

「どこまで出来るかと思って全て受けてやったが……。やはり、この程度か」

「えっ　？」

びっくりと少女は足を止めるのも、無理はないだろう。イッチーは脳が半ば飛び出してきているのだ。生きているのかすら怪しいというのに、意識がはつきりとあり喋っているのだ。

「ああ、痛かった。久しぶりに痛覚を刺激されたぜ」

喋っている間にも体は治り始め、立ち上がる頃には傷一つ残っていないかった。何事もなかったかのように平然としているが、会場は静まり返っている。死んだと思っていたのが生き返ったのだから、仕方がないだろう。というか、お前はゾンビか……。

「どう、して……」

初めて少女の顔に笑み以外の色が映る。恐怖と言う名の色が。

「次はお前が死ぬ」

イッチーが空を見上げ、それに釣られるように皆が空を見上げる。俺も見てみるが、そこにはどこまでも青い空が広がっているだけだ。何も

「ん？ あれは……」

黒い点のようなものがこちらに向かって落ちてきている。まさかと思ひ、闘技場を見回すが少女の姿はどこにもない。

「お前の能力では転移出来る距離は精々（せいぜい）百メートル程度。十倍で返してやろう」

イッチーはもう戦いは終わったとも言つかのように、そのまま出口に向かって歩き始める。黒い染みのような物体は、もう人の形だと理解できるまでに迫っている。

「どうして！？ なんで能力ちからが使えないの！？ いや、死にたくない！！ 死にたく」

「無駄だ、お前の能力ちからは使えない。後は死にゆくだけだ」

儚さを謳うように、その声は小さく風に流れるように消える。

ぐちゃー！！

俺は思わず目を瞑つぶってしまった。いや、そんなことをしても少女

の死に際の恐怖の形相が数日は脳裏を離れないだろう。迫り来る死に対して抗うことも許されず、理不尽な死を受け入れられない表情。ゲームに参加して以来、幾度となく見てきた悲劇。

対してイチーの横顔に映るのは勝利への歓喜でも、敗者への蔑さげすみでもない。物足りなさや諦観にも似た感情。

「つまらん……。やはり、俺と戦える奴なんてそういないか」

呟きを一つ溜め息に混ぜ会場を去る。

会場は出だしからの死人が出たことに、驚きと静寂に支配されていた。そして、一人二人と続けて続々と悲鳴を上げて会場を飛び出していく姿が見て取れる。命が大切なら逃げるのも手の一つと言えるのだろう。

「同感だな。退屈な……余興にもならん」

一回戦目の試合が終わり鏡八は見えずにいた結果に呆れ、眠たそうにしている。普通目の前で人が死んでいるというのに、眠くなる程の平常心があるっていうのは恐ろしいことだ。イチーも試合中、心を揺らすことなかったが鏡八も大概だ。俺はやはりそこまで傑物にはなれんよ いや、傑物でいいのか？

モニターを見てみれば、他の対戦者たちも次々と決着が着いている。負けたのであろう人たちの名前は灰色で表示されている。そう掛からないうちに全て終わるだろう。

「さあ、次の対戦者は誰だ？」

最後の名前が灰色になったところで鏡八は次を視線で促した。モニター画面に映っている名前が一度消え、新たに名前が幾つも出てくる。これらは全て、二回戦目の選手なのだろう。

「また、俺の名前はなしか……」

会場には逃げ出した者もいるが、それでもまだたくさん人間がいる。これだけの試合を全て消化するのは時間がかかる。これだけの数を本当にやっていたら、本当に何時まで時間があっても足りない。俺の番が回ってこないというのも頷けるだろう。

「次はタツキたちか。面白みがねえし、ちよつと弄るか」

鏡八が椅子の傍に置いてあつた機械を操作する。すると、画面が変更されタツキ対出していた全員の名前になっている。

「今回は一つのチームを潰せば、全員勝つたことにしてやる。まあ、勝てればだがな」

クク、と笑いを漏らしながら鏡八は選抜者を促す。選ばれたものは、一チームを潰せばいいだけだと歡喜していた。しかし、一部のものはそれを訝しむことのできる者たちだった。そのことに気付いた者たちのなかには、一チームを潰すだけという状況を怪しく思えるのを理由に棄権するものもいた。

しかし、それもほんの一部だけだった。理屈的に考えて一チームを潰すだけなのだから、無理からぬことである。

「ユージ君が強いつてのは知ってるけど、流石にこれだけの数を相手に出来るのか？」

先程は二人しかいなかったため広く感じたが、今は第二回戦で選ばれた全てのプレイヤーと仲間が集っていてひどく狭く感じる。その真ん中にはユージ君と映像で見たタツキの姿がある。そして、それをニメートルくらい離れた形で取り囲んでいる。

「よし、ユージ君行くぞ！」

「ああん？ 誰に言ってるんだ、殺せばいいだけだろうが！！」

戦闘状態に移行したユージ君の口は悪くなっていたが、片手剣を

「振り傲岸不遜に笑う。この数を相手にしても負ける気は一切ない
よう、萎縮しないというのは凄いことだろう。」

「さてと何が出るかな」

タツキは背後をユージ君に預け、上着をゴソゴソと漁っている。

そこから、出てきたものは

「対物ライフル……」

「何でそんなもんが、出てくるんだよ……!!?」

誰かが逃げろ、と叫んだ。しかし、皆が動き出す前に虚しくも銃
声が鳴り響き何人かの体が宙に舞った。俺は銃にあまり詳しくない
ため無駄にでかいライフルだな、くらいにしか思わなかった。しか
し、問題はあの上着のどこにそんなものが入っていたのかである。

「さてと、次は何かな」

しかも、今尚上着を漁っているのだ。何かの、能力付与でもされ
て異次元とでも繋がってるのか？ 冗談抜きでそう考えてしまっし、
あながちそれも外れではなからう。そうこう、考えているうちにも
次々とロケットランチャーやサブマシンガン、拳銃などといった銃
器を取り出し撃ちまくっている。

「ヒヤッハー、行くぜ!! オラオラ、オラオラ!!」

使い捨てる気なのか、残弾の心配などせずに全てを費やすかの如
く撃ち続けている。まさしく、阿鼻叫喚の様相を呈している。

「さて、こっちも行くかな」

ユージ君のゆっくりとした発言に似合わず、その体は視認するの
がやっとの速さで敵目掛けて切り込んでいく。ときに火を用いるが、
それも忘れていたかのように時々だ。やはり戦闘の主体は片手剣で
の斬撃なのだろう。

タツキにはユージのような人の限界を超えたような動きは出来な
いが、尽きることはない弾幕で敵を圧倒する。ユージは反面、己の
力だけで他者を圧倒する。その動きは対照的でありながらも、その
本質は変わらない 強いということだけは。

「飽きた」

「ええ！？ ちょっと待って、ね！？ ユージ君、戦闘中にそれは止めて！！」

ユージ君が一体何人程切り殺したくらいだろうか、いきなり攻撃の手をびたりと止めてしまったのだ。お陰でタツキは全方位を囲まれる羽目になり、弾幕が薄くなり始めたところを突かれ始める。

「もう全員死ね」

ユージ君が一つフィンガースナップをする。たったそれだけの行為だというのに会場は火に包まれた。タツキとユージ君を除いて全ての敵が焼かれていく。観客席までは火は届かなかったが、凄熱気を感じる。最前列辺りに陣取っていた人たちも我先にと後ろに下がってくる。

火が消えるのにそれほど時間は掛からなかった。しかし、その場は骨どころか剣も銃も何もかもが灰に還っていた。

「よし、これで終わり。タツキ帰るよ」

「死ぬかと思った……」

戦闘が終了したのを堺にユージ君の態度は変わっていた。しかし、タツキの方は幸い焼けなかったが近くで熱気をくらったため疲労困憊という状況だった。

「まあ、そこそこ楽しめたか？」

鏡八の方は一回戦よりは幾分か楽しめたようで、満足気に頼杖を付いている。しかし、それでも物足りな気にモニターを弄り次の対戦者を選抜しているようだ。

俺も次の試合を調べてみるが

「げっ……俺かよ」

遂に自分の番になったが、それはそれで緊張するものだ。いや、

ここで歓喜していれば人殺しを楽しんでいるという結果を得ることになるが。複雑な心境でモニターを見つめる。

「どうしたの、カズヤ。行くんでしょ？」

リンが何時の間にか隣に立っていた。一瞬驚いたものの、席を立ち上がり階段へ向かう。

中は光が届かず、壁に架かっている蠟燭ろうそくだけが頼りだった。少し埃ほこりっぽく乾燥した空気に覆われた道と、鋼鉄製の扉が延々と続いている。

「ここね」

リンは確認するように言う。扉の横には名前が書いてあり、一目で分かった。少し錆び付いた扉に手を掛け押し開く。

中は二十メートルくらいの正方形型で高さは三メートルくらいの部屋だった。鼻につく臭いに思わずコートすその裾で口元を覆う。見れば真新しい血だまりが出来ており、二、三人分くらいの量がある。

一回戦と二回戦で使われた部屋なのだろう。

「リン、ここは俺がやる」

真向かいの扉からも人が入ってきた所だった。一人だが体中を鎧で覆っており、手には両刃直刀の剣が一振り抜かれている。装飾がされ、まるで聖剣とも言わんばかりの輝く刀身。しかし、構える使い手ははつきり言って戦い慣れていない雰囲気だ。武器の性能に頼っていたか、ほとんど戦ったことがないかのように殺気が薄い。

俺も背から刀を抜くが、あちらの剣に比べて見劣りはするもの。負ける気はしない。このゲームにおいて勝つことに関しては、

全てを否定する気はないが 武器の性能でも間合いでもない。経験則だが、殺意が深く関わってくるのは間違いないと思う。相手を傷付けること 敵意を突き詰めれば殺意になる。敵意があれば相手を傷付けることに躊躇はないからだ。

「さて、どれくらいのもんか試そうかね」

「ハアアアア!!!」

血で足元を掬われぬよう気を付けつつ、距離を詰めるべく走り出

す。相手も剣を上段から振り下ろしてくる。まずは近付くのが目的だと刀で払い

「なっ　！？」

スパツとそのまま刀は両断されてしまった。しかし、相手の剣は勢いを緩めず振り下ろされている。

スライディングする要領で倒れつつ、折れた刀で剣の側面を思いっきり叩く。文字通り紙一重で頭の横の地面に剣が食い込む。横に転がりつつ立ち上がり、刀を見ているが折れた訳ではなく切られていた。

「なんつー切れ味だ、まったく」

使い物にならなくなった刀を放り捨て、邪魔なコートを脱ぐ。もう一度真正面から走り込む。

「死ね！！」

突き出された剣を斜め前方に進むようにして回避する。そのまま勢いを殺さず、肩からタツクル。

「ぐっ！！」

「そら、次行くぞ」

後ろに下がるまいと重心が前に出たのを横目で確認しつつ、足を払い突き出されたままの腕を持って一本背負いするが

「重いぞ、クソが！！」

力任せに背中から地面にぶつけさせる。鎧のせいで持ち上げるのは辛かったが、下ろす分には鎧の重さも相まってしたたかに背中を打ちつけただろう。この程度で気を失ってくればいいのだが、生憎と意識はまだあるようで手間のかかる。

先程折れた剣先を傷つくのいとを厭わず素手で掴み、鎧の合間の手首の筋肉を切る。

「ぐあああ！！」

「さて、この剣は貰っというてやるよ」

腕の腱を斬り、握力がなくなるところで剣を奪いそのまま首を落とす。意外と呆気ないものだったが、掌からは血が滴り続けてい

る。括り付けられていた鞘を奪い、剣を納め背中にかける。あとは
コートを着て、一旦落着か。

「傍目から見ると、とても危なっかしいわよカズヤ。それと窃盗よ、
それ」

「ですか。まあ、いいさ勝てれば。それと、折られたんだから弁償
して貰ったと考えればいいのさ」

リンからの評価は芳しくかんばなかったが、一回戦目の戦闘は無事終了
した。

二つの襲撃

十日程だろうか、未だ闘技場での果ての見えぬ戦いは続いていた。なにせ、圧倒的に時間が不足しているのだ。人数が多過ぎるのだから仕方がない。しかし、時間が過ぎるのに比例して死人の数が増えるのも事実だ。気の滅入ることで、闘技場から出来るだけ離れたいというプレイヤーの考えもよく聞く。自分の試合がないときは、闘技場にはほとんど人は寄り付かない。いるのは酔狂な奴か、単にイカれた奴らばかりだ。

「だからといって、主催者がここでラーメン啜^{すす}ってていいのか？」
「問題なかるう。それに今日、明日にでも終わるだらうしな」

初日からの試合数は三回、運良く生き残れたがぞつとする試合もあつた。三回目ときは特に血で足を滑らせ、その隙を狙われてしまふなどという簡単なミスをしてしまった。なんとか相手の手首を切り落とし命を繋いだが、久しぶりに死ぬかと思った。だが、生憎と三回ともに相手が一人、乃至二人^{ないし}だったため大人数で囲まれることもなかった。

そして少し昼飯には遅い時間を狙い、ユージ君の店で鏡八と食事をしているという訳だ。だが、今日は珍しくフード付きのコートも手袋もしていない。店内は酒盛り騒ぎで静かに食事を楽しむ余裕はなかったが、どうやら俺と鏡八を除き全員タツキの仲間であるらしく気兼ねなくこの姿でいれるからだとか。少年に少女、大人、軍服を着たものなど色んな人間がいる。それだけ人望があるのか、或いは人を寄せ付ける魅力でもあるのか。いささか、外見からは判断しかねるが。

「でも、何で今日、明日なんだ？ まだたくさん残ってるぞ？」

「神のみぞ知るところってやつだな。まあ、俺は神じゃないが」

冗談めかして言うが、実際このゲーム内では神にも等しいと言えるだらう。しかし、こいつも大変だ。ほぼ一日中座っていなければ

ならないのだ。プレイヤーはその姿を見て、殺意と闘志を燃やしそれを英気としている。故に、戦わせるのなら自身の存在を目の前に晒さなければならぬのだ。

「俺の試合は午後にあるのか？」

「知らん、今パソコンお前に貸したままだろ」

そう言えばこの世界に来て宿で借りたままになっていたが、あれがないと情報が引き出せないのか？ 幸い持ち合わせていたので、渡して調べてもらうが今日はもうないようだ。しかし、何時見ても不思議なパソコンだ。両手に少し収まらないくらいのサイズだといふのに、どれ程の情報を蓄えているのだろうか？

「俺は、もう行く。カズヤ、今日は奢おしってくれ」

「何時も奢おしってる気がするがな」

鏡八は奢おしらせようとするが、何時ものことなので苦笑を混ぜつつ支払いを済ませる。振り向けば鏡八の姿はなく、人々の喧騒が耳を打つばかりだ。鏡八が逃げようとするれば、足音一つ立てず俺の前から姿を消すことは容易いが。

「……礼くらい言ってもいいだろうに」

一つ嘆息をして通りに入る。そこには鏡八の姿はなく少々物悲しさを感じたが、俺も人混みの中へ消えた。

夜がしんと深ふけた頃、宵闇に紛れて動く者たちの影があった。服装も武器も統一感がなく、共通項は一つもないと言っている。いや、目的だけは共通していると言える。鏡八を殺すこと、それだけのために百人近くにも及ぶ者たちが集こったのだ。

「明日は決行日だ！！ 明日こそ長きに渡る、憎悪、殺意を晴らせる日が来るのだ！！」

リーダー格と思える男が熱弁を振るっている。そして、それに同調するように皆が頷く気配がある。深夜と言つこともあり静寂を壊さぬよう、それでいながら皆に伝わる声量で男は叫ぶ。

「各自、計画通りに頼む!!」

男は数分間喋り続け、締め括るように言い聞に溶けるように姿を消した。

何時かは夜も明け、朝が来るものだ。今日は雨が降りそうなほどではないが雲が多く、日差しが遮られ^{かえ}丁度良い涼しさだ。そして、何時も通りカズヤが後ろの席に座つたのを遠目に見やる。十日も経てば人はほとんどいなかった。死亡と棄権、理由は至って単純なものだ。初日でイッチーとユージ君の戦いっぷりを見れば棄権も止むを得ない。それでなくとも血なまぐさい戦いを好む者もそうはいない。

「さて、今日の試合は」

ドゴーンッ、ゴゴゴオ!! と、どこか遠い所で爆発の音ととてつもない質量を持った物体が動く音がした。モニターに向けていた視線をずらし、音源を流し目で見る。すると、闘技場の入口から武装したプレイヤーたちが押し寄せてくる。

「……何のつもりだ?」

立ち上がり、その拍子に腰のナイフがちやりつと鳴る。見ただけでも会場の入口は岩のようなもので塞がれており、会場や背後などを三十人近い数で包囲している。しかし、それでも慌てるほどのものではない。

「貴様の茶番に付き合うことはないということだ、死ね!!」

背後に立っていた女が叫びつつ、手にした槍を思いっきり突き立

てる。しかし、穂先が刺さるかと思つた瞬間には腕と槍が半ばから絶たれていた。俺から見れば遅すぎて五回は殺している速度だったが、振り向かずに腰のナイフを抜きざまに断ち切つただけだ。

女は痛みに顔を顰めつつも、残つた柄で頭を叩き割ろうと振り上げるが

「邪魔だ」

首をナイフで切り落とし、無造作に血を払い出口へ向かう。その間に椅子に掛けてあつたフード付きのコートを羽織つておく。道を塞ぐように十人程いたが、向かうものには無慈悲なまでに死を与え、逃げるものは追わなかつた。だが、出口には岩が詰まつており通れない。

「まつたく、刃こぼれしそうで嫌なんだが……」

短く嘆息し、一瞬のうちにナイフを三度閃かせる。それだけで、鈍色の光の奇跡をなぞるように岩が切れた。断面は磨かれたように滑らかで恐ろしくなるほどだ。そのまま出口から外へ出るが、そこにも五人ほどプレイヤーが立ちふさがっている。一度腰を落とし前進しつつ、懐からもう一つナイフを取り出し近くに居たものを斬る。「まず一人」

驚きによる一瞬の隙を突き、近くにいた二人にナイフを投げつける。狙い違わず、吸い込まれるように首へ飛ぶ。その間に残り二人が我に返り、槍と剣を振り下ろす。

「ちっ！！」

ナイフを取り出す暇が無い！！ 迫る槍に手を沿え、軽くずらす。それだけでベクトルを狂わされた槍は俺の髪先を掠り、剣士の首を抉つた。絶命こそしなかつたものの、数分の命であろう。死体からナイフを引き抜き、槍使いの首を斬る。

だが至る所から、草木を掻き分けて進む音がする。一つ息を吐き出し、駆け出す。

気配を頼りに足音を消して進めば、誰にも見つかることなく移動することは容易だ。残念ながら、俺の目から見れば今のプレイヤーはあまりにも弱い。イッチーやユージ君くらいのクラスならば問題ないが、今のプレイヤーにそれを求めるのはあまりに酷こくな話だ。

しかし、プレイヤーの配置からして誘い込まれているのは一目瞭然だった。

「ようやく来たな、今日こそ貴様の命日だ」

茂みが開けた場所には、一人のプレイヤーが立っていた。少し浅黒い体表に、乾いたような金髪を立たせた精悍せいこんな風貌ふうぼうの男。身長は少し高めの百七十代であろう。防具は最低限だけというのを見るに回避重視だろう。

だがゲーム内の服は柔らかいくせに刃を通さないなどと、作った俺ですら意味の分からない服が大量にある。これはビジュアル重視というのもあるが、完全に趣味だ。

「ゲーム攻略組のリーダー、名前はたしか……ライ。ギルドと銘打ち、集団でのゲームクリアを行っている者の首魁しゅかいが何用だ？」

記憶に照らし合わせて見つけた答えが、ギルドという名のゲーム攻略集団。規模で言えば百人前後で徒党を組み攻略する大規模な集団だ。そして、それらを統率しているのが目の前の男。強さも今のプレイヤーの平均を頭一つ飛び出たもので、流石にイッチーやユージ君には敵わないが、目的は俺を殺すこと。そして地球に返ることだったか？

「言わねば分からんか？ 貴様を殺せば、我らの悲願は叶えられるのだ！！」

「ふん、詰まりは俺を殺しに来たって訳だ」

タイミングは悪くないが、何故俺をここまで誘い込んだのか気になる。闘技場で困らせてしまえばいいのだ。それなのに、ここまで誘

き出した理由は何だ？ 相手を下に見ている分冷静に思考すること
が出来た。だが、その意図が全く掴めない。大規模な能力で他人を
巻き込まないように、などと単純なことであればいいが……。

嫌な予感だけが增えるが、今日追いつめられることも承知の上で
ここにいる。何故なら、俺はパソコンにアクセスして密会が行われ
ていることも、計画があることも掴んでいるからだ。

「だが、今日の目的は貴様の始末だけではない。カズヤというプレ
イヤーの殺害も含めてだ」

「!?!」

「お前はナレーター、K、複数の名前と服装でカズヤというプレイ
ヤーに接触している。ナレーターときには風を用いて周到に音を
鳴らさず、Kの場合は行動を共にしている。だが、カズヤとやらは
強くも、取り立てて能力が秀でている訳ではない。怪しい故に、不
確定要素は排除すべきだ」

努めて顔には出さないようにしていたが、俺は内心とても動揺し
ていた。そして、全てを掌握せずにおいた自分を叱咤しつたする。所詮、
自分が狙われるだけだと決め付けておいたのが良くなかった。

「死して償え!!」

俺の動揺を見切り、駆け出した相手を見てようやく戦闘に移行し
たことを思い知る。ライは背に掛けられた二本の片手剣を素早く抜
き、今のプレイヤーの基準にしては遥かに速く走る。

「ッ!!」

気を持ち直し腰ナイフを抜きざまに片方に叩きつけ、もう片方の
側面を蹴りで払う。いくら俺とはいえ、気を持ち直すのが一瞬遅か
つたら少々危険だったことは否めない。

「だが、甘いぞ!! 一本で何時まで支えられると思っている!？」
言うだけのことはあるようで、その手数は凄まじいものがある。

懐からもう一本取り出し、応戦するが闘技場の方へ意識が向き戦闘
がワンテンポ遅れる。

「ええい!! うざったい、折れる!!」

ナイフを投げ、切り払いで払った剣に割り込ませる形で、ナイフの背にあるソードブレイカーで剣を無理矢理へし折る。相手は惜しげもなく折れた剣を俺に投げつけ、もう片方を背にしまう。

「死ね」

「くっ!!」

投げつけられた剣を払い、視界に飛び込んできたのはライが双銃を構えている姿だった。その視線は勝ったと思いきった目だった。至近距離から発砲しようというのだから、それも無理からぬことだろう。

バ、バン!! と、ほぼ同時に放たれた銃弾を 切り捨てた!!

「ふっ、ナイフがあれば出来ないことはない」

「なっ!?!」

また絶句するのも無理からぬ話だ。だが、このゲームで規定されたスキルを使えば斬れなくもない。このゲームには能力の他に、獲得する形で入手出来るスキルがある。今のは心眼という音速に近い弾丸でも斬ることが可能というものだが、集中しなければ使えないし連発も集中力の問題上不可能に近い。

「お前は器用貧乏だな。悪いことじゃねえが」

このゲームの性質上寿命はなく、多岐に渡る武器の扱いなどを習熟したものが有利であることなど言うまでもない。詰まり、一見習得し辛い二刀流の扱いも双銃も悪くは無い。寧ろ着眼点は素晴らしいとさえ言える。

しかし、相手の間合いの方が依然として有利であることにも変わりはない。こちらから仕掛けるよりは、相手の出方を窺った方が賢明だ。

だが、俺の考えに反しライは懐から古い懐中時計を取り出して時間を確認した。

「時間だ。今から、カズヤの殺害を執行する」

鏡八が襲われたのは理解できるが、今の俺の状態は到底理解出来るものではなかった。

三十人程のプレイヤーに囲まれて、剣先を突きつけられ一体どうしろというのだ。恨みを買うような生き方をしていないとは言わないが、このタイミングじゃないといけない理由が見つからん。大体一人のプレイヤーを集団で囲むというのは前代未聞だ。

「お前がカズヤだな？」

集団の中にいた一人の男が問う。動きやすそうな軽装で、鎧の類は最低限しか身に付けていない。リンが警戒心も頭あたまに刀に手を沿え、何時戦闘になっても大丈夫なようにと準備をする。

「そうだが？」

「恨みはないが殺す！！」

男が抜刀し駆け出すのを皮切りに、他の一部の者たちも各々武器を構え駆け出す。殺気が身を打つが、それは恨みのこもったような強いものではない。だが残念ながら、俺には鏡八のように全方位を防げるような技量も無い。だからといって、死ぬわけには行かないのだが　！！

「ちよいと失礼」

一言断ことわってリンの腕を掴み引き寄せる。引き締まって細く、女の子特有の柔らかさを感じるが今はそれどころではない。この感触は戦闘中以外でゆっくりと堪能したいものだ。そして、全ての武器が振り下ろされる。

「無駄だ」

全てが僅かにずれた。いや、逸そらしたのだ。武器はまるで俺を中心に円を描くように地面を深く抉り、各々の表情には驚愕や疑問が過ぎる。

「今のは風だな？　空を切ったときの逸よらされた感触、間違いある

まい」

その中でも気付いた者もいた。これだけの人数での戦闘だ。知識量も経験量も、相手の方が上なのだからすぐに手の内がばれてしまふのは仕方が無い。ここにきてゲームで初めて切った能力と言う名のカードも役にたたなそうだな。

まあ、逸らし方は至って簡単なもののだが。武器に風でほんの少し力を与えてやれば、ベクトルを狂わされた武器はあらぬ方へと向かうのだ。

「隠していたのか……能力を使ったことがないと聞いていたというに……」

今度は、ぼそぼそと喋る声がどこかで聞こえる。だが、こいつが言っていることは正しい。俺はこの風を操る能力を未だにほとんど使ったことがない。使ったときに見られた場合は全て殺して口を封じた。切れるカードは、あればあるだけいいものだ。

「さて、今度はこつちから行こうか」

俺は動かさず、精神を集中して風を集める。無風だったのが、いきなり強風へと変わる。鎧など重いものを着ていないものは、すぐにも吹き飛ばされそうな程だ。鋭すぎる風は皮膚などを切り裂き、血の混じった空気を撒き散らす。

「竜巻……」

想像する風の使役方は竜巻だった。爆発的に増えた風はやがて渦を形成し、形あるものを全て切り裂いていく。血と肉片が舞い骨すらも断ち切ってしまう風に、会場にいた人々はパニックを起こし逃げ惑う。しかし、風より速く動くことなど出来るはずもなく無慈悲に酷薄なまでに死ぬ。その中で立っていられるのは俺とリンだけだった。

振り払うように竜巻を一瞬で消し、闘技場内を見渡す。そこには生存者など一人もおらず、ただ人であった者たちが肉塊へと変わっているだけだ。

「無茶苦茶ね」

「それでもないさ。とても疲れたし、連発も出来ない。一発こつきりなんて使えない能力だ」

近場にあった椅子に腰掛け、空を仰ぎ見る。多かつた雲は風で吹き流され、気持ちのいい晴天が覗いていた。血と肉塊が散乱し、鼻につく鉄の臭いが少々アンバランスだった。

スルト

「何だ、あれは……天災規模の能力を操るなど……」
「ふう、これで安心したぜ。ゆつくりと殺し合いをしようじゃねえか」

突如発生し、数秒で消えてしまった竜巻を見て呆然と呟くライ。
しかし、それも当然の話だ。

通常風を操る能力を使えても、鋭く研ぎ澄ました刃状にしたもので切り裂くとか、酸素を無くすくらいしか使い道が無い。集中力と想像をすれば、あれを起こすことも一応不可能ではない。だが、人の精神は有限だ。人という枠組みを超えない限り、精神をあそこまで高めるのは土台無理な話なのだ。あんなもの、人間の範疇で使えてたまるか。

そういう意味では、カズヤは人間を辞め始めていると言える。

「おら、よそ見してつと殺すぞ!!」

殺気を放ち、こちらを気付かせる。それだけで我に返り、即座に銃弾を放つたのは悪くない。十分に狙いをつけて撃つたものではないが、狙いは心臓と悪いものではなかった。そして、今度は俺は避けない。キーン、と澄んだ金属音が鳴り響き弾ける。衝撃は少しあったが、外傷は無い。

「生憎と俺の刃物は特別せいだな、銃弾くらい弾いちまうんだよな」
コートを軽く開けて見せる。そこにあつたのは、ありとあらゆる多種に渡るナイフ、ナイフ……。数え切れないほどのナイフをびっしりとコートの内側に付けてあり、まるでナイフで作られたパズルかのようにほとんど隙間が無い。

「馬鹿な……それだけの重量で体を覆いながら、戦っていたというのか!？」

流石に驚きを隠せないようで、銃弾を乱射する。その狙いは冷静さを欠いているとはいえ、頭に飛来するものが幾つかあった。頭に

飛んで来たものはナイフで切り捨て、胴体に来たものは無視した。

「もう、弾切れだろ？」

「くっ！！」

「遅い！！」

ライが銃を片手剣に代えようとしたときには、俺の掌底が顎に入っている。そして流れるような動作で、空中に僅かに浮いたライの丹田辺りに肘打ちを入れる。吹き飛ばされるように、三メートル程空中を浮遊して落ちた。

倒れたままの状態のライの目に怪しい光が灯る。能力の発動の雰囲気だと勘付けた所までは良かったのだが、いかんせんライの能力は未知数だ。

「燃える！！」

俺のいた地面が燃え　というより、爆発と言った方が正しい

、驚き背後へ跳んだのが間違いだった。

「捕まえる！！」

他のプレイヤーが増援に来たのか！？　精神を研ぎ澄まし、人の気配を探るが誰もいない。

しかし、この一瞬の集中が俺の対処を誤らせた。ライが言ったのは人ではなく、自身に言ったものだった。多分領域操作系の能力なのだろうが、近くにあった木々の枝が俺の手首を万力のような強さで縛り上げた。握力が弱まり、ナイフを取り落としてしまう。

「無様だな、これでお前も終わりだ」

「はっ、笑えるぜ。残念ながら、腹を抱えては出来ないがな」

皮肉を混ぜつつも、負ける気は毛頭ない。ライ自身も片手剣を取り出し、何時でも殺せるのだと言わんばかりにその存在をちらつかせる。

「何故、カズヤとかいうプレイヤーに拘った。その体の傷も、前回の世界で庇ったものである。本来なら今回の世界でカズヤを抹殺するつもりだったものが、貴様が自身を賭けにしたせいでギルド内で揉め見送る形になりそうだったものだが」

コート（ふち）の淵からは、包帯がちらつと覗（のぞ）いている。どれだけギルドとかいう集団は情報を溜め込んでいるのか。少々、危険な組織である気もしてきた。

「どうにか、持ち込めた計画だが失敗に終わった。だが、貴様が死ぬ前に聞かせてもらおうか。何故奴を生かすために自身を賭けにしたのかを！！」

「あいつがこのゲームで必要だからだ」

「ふん、意味の分からん事を。だが、最後になってようやく話す気になったか？」

「ああ、お前の手向けとしてやろう」

俺の言葉が言い終わった瞬間には、ライは弾かれたように反射的に俺を横薙ぎに斬り殺そうとした。腹筋、背筋、その他の筋肉に力を込めて無理矢理体を逸らし避ける。服の一部と肉に数ミリほどの傷が入ったが動けない程ではない。その反動を利用し、踵落としを頭部に見舞う。しかし、体勢も不十分だったことから大してダメージも与えられずしよるけるくらいだった。

しかし、俺はそれを狙っていた。頭部を踏み台にして、逆上がり（さかあがり）の要領で足を縛っている枝に近付け空中で靴底同士を合わせる。すると、しゅきんと靴に収められていたナイフが飛び出し枝を断ち切る。

「馬鹿な、ギミックを　！？」

「驚くのは後がいい」

ナイフを拾い上げ、両手両足を武装して走る。都合、四本のナイフを使って近接戦を行う。手で持ったナイフを閃かせれば、ナイフ付きの足で蹴りを放つ。当初の二刀流ならまだ何とかなっただかもしれないが、四刀流の手数には圧倒される。

「くそっ！！」

後退して懐から何か取り出す。何を取り出したのか分からんが様子を見ていると、それをライは地面に思いっきり投げつけた。フシユーツ、と吹き出る音がして煙が視界を遮（かく）っていく。どうやら煙幕

らしいな、と理解しつつ聴覚に集中すると遠ざかっていく足音がする。

音を頼りにナイフを投げる。当たったようだが、致命傷ではないようで足音は一瞬遅れて遠ざかっていく。

「おいおい、逃げんのかよ。人様に迷惑かけてそれでいいと思ってるのか？ ククク……」

顔は何時もと同じで嗤わらっているのだろう。歪ひずんで壊れたような、殺すことが楽しくて楽しくて仕方が無いという表情かおで。

ゆつくりと獲物を躡なぶるように悠然と歩いて追い詰める。視界が晴れたのは、変形された地形が広がる場所だった。そこにあつたのは、土を固めたような槍が幾重にも生えている三メートル程の深い堀。先程の枝を変形させて即席のロープにしたのと同じ能力だろう。だが見た所かなりの範囲が能力で変形されていて、ちよつとした池くらしいの広さはあるだろう。

「よつと」

気配は今尚離れて行っているが、これを迂回していたら逃げ切られるだろう。ひよいつと、一足踏み出し爪先立ちの要領でナイフの刃先と土の槍の矛先を合わせる。傍目から見れば、曲芸の一種だと言えるだろう。違つのは綱渡りは線だが、これは点と点だということだけだ。

「なんとかなるか？」

そのまま次々と足を踏み出し、向かい岸へと向けて駆ける。しかし、その速度は地上を走るとほとんど変わらず、滑るような動きに迷いは感じられない。

ほどなくして地面を久方ぶりに踏み、安堵あんどするのも後回しに追う。「だが、何故だ。奴はこのタイミングで逃げる理由など……」

恐れをなして逃げた、安易に結論を出すならこれで構わない。しかし、何か目的があつて逃げているとしたら……？

「はあ、はあ……!!」

森の中、一人ライは走っていた。能力を使いながらも、あの常人離れた鏡八から逃げ切るといのは高望みし過ぎというものだ。それにライは今日の計画で、自身が命を落とすことも有り得ると感じていた。だからといって、鏡八から逃げたのは命が惜しくなった訳ではない。彼にはまだやらねばならないことが残っていたからだ。「スルト、どこにいる!!」

目的地だったのか、ある一点で立ち止まり大声を上げる。腕は先程投げられたナイフによる傷で血が滴り、失血しすぎたのか顔色も悪い。だが、それでも瞳に宿る強い光だけは絶えていない。命を賭ける覚悟が見て取れるような悲壮な眼光だ。

「ここだよ、ライ。目的のものは入手出来たのかい？」

影が染み出すような動きで、木々の合間から声の主が姿を現す。スルトと呼ばれた男の身長はライよりやや低く、少し伸びた綺麗な黒髪を無造作に一つに束ねていた。線の細い顔立ちで、体も筋肉質とはいえない。戦士ではなく、学者のようなイメージを抱かせる。ジーンズにシャツという戦場に似つかわしくない出で立ちで、最低限の防具は疎か武器すら所持していないのも原因の一つだろう。

ライはスルトの態度に不満そうな顔をしたが、プラスチックの破片のようなものを手渡した。大きさはピンセットでつまないと、掴むのも困難なほど小さい。

「確かに」

スルトは柔和な微笑を湛え、それを丁寧に袋に入れて口を縛る。

俺がその場に着いたのは丁度袋に破片を入れて懐に仕舞うときだった。

「今のは粉末から再生し始めた俺のパソコンの一部だな？ 目的は言わずとも、いくら絞れようが貴様らの手には余る代物だ。ああ、だが返さなくていいぞ。貴様らはここで殺す」

王者の風格を漂わせるかの如く、全てのものをひれ伏させようという殺気にライが竦みそうになる。だが、俺の殺気を受けていながら失神しなただけマシであろう。破片自体は俺を縛り上げ、切ったときに剣に付着したものが再生し始めたのだろう。

遊んでやるのも、いい加減飽きてきたことだ。今更一人増えたところで、殺すことには変わらない。

「くそっ！！ スルト、逃げる！！ 今それを失えば」

「囁るな……」

ライは捨て身で時間を稼ごうとしたのだろうが、抜剣することすら叶わず額にナイフが突き刺さる。今の俺の顔には先程の歪んだ笑みは浮かばず、ただ機械の如く敵を殺す無慈悲な目をしているだろう。俺としても楽しみみたいところだったが、あれを手中に納められずにはゲームバランスが崩壊する。

「ふむ、速いですね。でも、ここで死ぬわけにはいきませんので」

「だから、囁るなと言っている……」

スルトは何か言っている途中だったが、その胸にナイフを突き刺す。血に濡れた刃先が背中から飛び出しているが、スルトの表情には苦悶も危機感もない。訝しげに観察するが、不審な点は見つからない。だが、直感は何かあることを告げている。

「無駄ですよ。これは質量を持った、ただの幻です。それに、貴方が渡すまいとしているものは転移させて本体が回収しています」

「クソが！！」

毒づくが、今更後悔したところで意味はない。遊んでいたことが

間違いだつたのだ。

「僕の目的は、あれを使ってこのゲームを支配することなんですよ。ライは鏡八を殺すためだと言って聞かせましたが、あれがあれば貴方の存在など路傍の石も当然です」

「だから、スルトなのか……。北欧神話における世界に火を放つ者にして、ラグナロクの勝者。神を気取るつもりか!？」

プレイヤーネームの由来を紐解いたのはいいが、あれが再生しきってしまった場合には間違いなく勝者になる。あれにはゲームにおける全ての情報が記録されている。情報を握るといふのは自分が有利な戦いが出来る。

それに、あれには隠された反則的な用途がある。

「博識ですね。そう、それこそ私のプレイヤーネームの由来。さて、あれが完全に再生するのに長い時間が掛かるでしょう。なにせ粉からですからね。あわよくば本体をとも思いましたが、ライ程度では無理な話です。では、また会える日を。ふふ、さようなら」

言いたいことだけ言うと、スルトの体は塵に変わり風に巻かれて消えていった。ナイフに付着した血も消えうせ、鞘に納め腰に掛ける。

「失態だ……」

闘技場は閉鎖　もとい、使用出来る状態ではなくなったので次の世界に転移させられることになった。その旨が告知されたのは、鏡八が戦闘を終え闘技場に着いてからのことだった。闘技場はほぼ全壊しており、その場に残り眠っている俺を見て鏡八は呆れたらしい。当然そこには死体の群れしかなく、俺と寄り添うように傍にいるリンしかいなかった。

俺が再び目を開けたのは、世界に鳴り響くアナウンスの声だった。
「プレイヤー諸君、ゲームはバッドエンドを迎えた。よって、次のゲームに移る。開始は明日の明け方だ」

たったそれだけの簡素で味気ない事務的なアナウンスは、世界のどこからでも聞くことが出来たらしい。寝ぼけた俺はそれを聞き逃したが、幸いリンはそれを聞いていたため問題はなかった。一つ欠伸を漏らし、俺達は宿に急いだ。何が起きたのか俺だけでは全貌^{ぜんぼう}を把握しきるのが困難だったからだ。宿には待ち構えるように鏡八の姿があった。疲労のせいかな普段の飄々（ひょうひょう）とした態度ではなく、気だるげなぼんやりとした表情で溜め息を付けていた。服は汚れていたが、血などは付いていない。

「よう、遅かったな」

「いや、疲れててさ。派手にやつちまった、はは……」

闘技場を半壊させてしまったのは俺なのだ、苦笑するしかない。

鏡八は、そんなことどうでもいいと言いつつ宿に入っていく。真面目な雰囲気に取り残され、頭を掻きつつ鏡八の後に続く。中は埃が薄く積もっていたが、俺が歩くたびに近場の窓から全て流れていく。風が一つ撫でるように過ぎていく度に、空気も清浄なものに変化していく。

長い廊下を経て食堂に入ると、そこには酒瓶が一つにグラスが三つあった。そこで鏡八はコートを脱ぎ散らし、シャツを巻き上げ腹の消毒をしていた。

「まったく掃除機か、お前は」

「いや、俺ってカビっぽい所とか埃っぽい駄目なん」

「それはいいけど、傷は大丈夫なのかしら？」

軽く流されたのが精神的に痛かったのは内緒だ。リンは鏡八の腹の具合を見ているが、様子を見るにそんなに悪い状態ではないのだろう。大体、鏡八が大怪我するようなことは想像つかない。

酒をグラスに三つ注ぐ。小さめのグラスだったが、それだけで半分ほど空になった。その赤い液体を口に含んでみるが、まったく美

味しさというものが分からない。

「面倒なことになった。パソコンを盗まれた」

「あれって、確か情報たくさん蓄えてるはずだろ？ やばいじゃねえかよ」

「だが、まだ大丈夫だ。盗まれたのは破片だからな」

そう言つて、グラスに口を付け唇を湿らす。味わっているのか、ゆっくりと嚙下する。

破片 それは、パソコンの一部なのだろう。あの不可思議な再生能力があるのだ。何時かは完全なものになるのだろう。だが、まだと言つたのだ。当分は時間があるということだろう。

「そういうわけで、俺は当分消える。ゲームにも干渉しない」

「わざわざ、パソコンの検索にか？ ご苦労なことだ。チーターの存在くらい、何時もなら面白がりそうなものだがな」

「ああ、ただのチーターならな。奴め、神を気取るつもりだ」

プレイヤーの存在を越えることに怒りを覚えているのか、それとも別のことを考えているのか黙り込む。それに釣られるように、俺はもとい始めから会話に参加するのを控えているリンも無言になる。じつと空気に耐えるられず、酒を啜る音だけをさりげなく鳴り響かせる。

「それで何故お前が襲われたのは何故だ……と聞くのは野暮な話か。じゃあ、俺が狙われたのは？」

「知るわけなかるうが」

理由を知らない訳ではないが、言つたところで気にしすぎるのがオチだ。プレイヤーは皆自立して行動するのがモットーで、甘やかすように優しすぎるのも問題である。

鏡八は明日に備えて寝ろ、と言いつつ残り部屋に戻っていく。静寂の中に液体を嚙下する音だけが虚しく響く。

「俺も仮眠するか。リンも少し寝たほうがいいぞ」

「そうね、また明日」

グラスに残った酒を一気に飲み干し、部屋に戻るリンの後ろ姿を

ぼんやりと眺めた。何時もと変わらぬ様子はどこか安心出来た。何故不安を感じたのかは知らない。

「酔った……か、な？」

ふう、と一つ息を吐き出し机に手を付いて立ち上がる。手が微かに震えた気がして、見てみるが何事もなかった。戦闘を行なった日は何時もこうだ。人を殺すことに躊躇いはないし、人を殺すのに罪悪感もほとんどない。だが、全てが終わったとき良心が痛む変わりのように手が震える。だから、俺は剣を握ったのだと常々思う。銃のように己が手に殺した感覚をなくして、人を殺してしまわぬように。

「人を殺さないのが、倫理的には正しいのだが……」

呟きは泣きそうなほどにか細かった。

静寂の間を切り裂くように、照らすのはパソコンの明かりだった。いくつか情報を引き出すために置いておいたのだが

「……ん？」

いざ触れてみると、俺以外が触った履歴があり驚いて表示させる。それはここ最近貸し出している間にカズヤが調べていたものだった。それを見て、今更ながらにここ最近に触れていなかったのを思い出す。好奇心を刺激され、履歴を次々に表示させる。大半はイッチーとユージ君、それにタツキを中心に調べたものだった。中には面白いものがいくつか含まれていた。

「戦神楽……また、懐かしいものを」

そこに表示されているのは一振りの刀だった。どんな材質なのか漆黒の刀身は闇を切り取ったように濃く、装飾は全くされていないに等しい。形状は日本刀とそれほど大差はない。物凄い切れ味に加

え、その他多数の能力を付与し完全無欠の最強の一振りと言っても過言ではない業物だ。説明書きを添えてあるその画像は、俺にとっ
ては見ていて懐かしいものだ。

「ふっ、失われし魔剣と言ったところか」

僅かに笑みを添え皮肉に笑う。カズヤは最強の武器を求めて検索したのかもしれないが、この刀は遠い昔に失^うせたはずだ。俺自身が消去したものに含まれていたのだから、漏れがなければ塵一つ残さず消滅している。

俺がゲームを作り上げたばかりの頃だった。一番最初に作られたゲームバランスの崩壊した世界に存在していたものだ。その時のゲームは全てのデータを破棄した。そしていくつものゲームを作り破棄し、それら全てのゲームの残骸を下地に今のゲームが築かれている。それ故に、極稀^{ごくまれ}にだが消したはずの遺物が見つかったりする。まあ、ほとんど可能性はないに等しいが。

「ん……アヤメとは誰だ？」

他に調べた中に一人の少女が含まれていた。十歳ほどの可愛い少女だ。遂にロリコンにでもなったのかと顔を顰^{しか}め、額を抑えて目を通す。黄金色の髪を足首辺りまで伸ばし、瞳は美しい碧眼だ。髪は長すぎて、歩くのも一苦労しそうだと思う。読み進めて分かったことだが、リンの義妹であるらしい。

ある程度検討がついた所で、興味が失せ他にめぼしいものもないようなので本来の仕事に戻るとしよう。

「スルト……奴を殺さねば被害はカズヤにも及ぶ可能性がある。今あいつを殺されるのは痛手だ。まだ、あいつには働いてもらわねばならん」

そこで一度息を吸う。冷たい夜風が肺を満たし、思考が澄んでいくのが分かる。

「ようやく見つけたのだから……例え、何十億の命が失われようと覚醒してもらわねば」

風が一つ凧^ないだ。まるで言葉を紡ぐのを、必死に止めようとして

いるかのようにだった。それによって、どれだけの血が流れるのかわからない。幾多の悲しみが降り注ぎ、どれほどの人を殺めるのかさえも誰にも理解出来はしない。

「このゲームは崩壊するのだから」

封印されし者と契約者、そして……タツキ（前書き）

久しぶりの投稿。学校が忙しくて、嫌気が差す毎日です。

封印されし者と契約者、そして……タツキ

目が覚めたのは妙な浮遊感を感じたからだだった。視界に映り込んできたのは、闇夜の森とリンの横顔。しかも、一メートル程の高さという訳の分からない場所で、というオマケ付き。咄嗟とつぱに受身を取り立ち上がると、淡い燐光が俺の体を取り巻いていた。見覚えのある　というより、世界を移動する度に見ているのだから知っていて当然だ。

世界を越えても時間は、まったく一致しない。前回の世界では明け方だったはずだが、この世界は深夜のままだ。世界を越える弊害へいがいは、時間と文明レベルの違いくらいだ。だが、そんなことよりも物凄い違和感を感じた。

息苦しく、例えるなら全方位から殺気をぶつけられるような感覚。知らず剣を抜き、全方位に視線を配る。そして、その感覚の正体に気づき戦慄した。殺気のような人を圧倒する存在感。

「何がいる……？」

「そうね、でも敵意はないわ」

心拍は天井知らずに上がり、冷や汗がたくさん出る。空中から始まったのは、ベッドで寝ていた間に転移させられたのである。ゲームにおける座標軸についてはよく分からないのだが、転移しても大抵リンとはぐれることはそうない。気配は一向に消えず、こちらに対しての敵意も感じられないため一先ず剣を納める。

「最悪だな。来て早々面倒になりそうだ」

落ち着いたが、ここにおいても情報を集めることは出来ない。麓ふもとの方に街灯りが見えるので、まずはそこに行ってみようと足を進める。夜風は涼しかったが、当分冷や汗は止まることはないだろう。

「一体何がいるのかしらね？」

「さあ、知らんが楽しいことにはならないだろ」

「戦うのが好きなんじゃないの？」

リンの疑問は半ば確定したものを確認するような言い方だった。俺自身は戦うのは面倒だと思っ**て**いるはずなのだが、リンの評価では戦闘狂だとも言うの**だ**ろうか？ でも振り返れば、殺すこと事態は好んでいるの**か**もしれない。戦闘中は常に高揚感と少しの不安で埋めつくされ、殺すことしか考えていない。楽しいの**か**知らんが、高揚感に胸を支配されるのは殺したいから……なの**か**。

「血ガ、アレバ……コノ封印ヲ……」

飽和して反響したような不快感を与える声**が**空間を震わせる。だが、そこは世界とは別の空間で放たれたもので、世界には一ミリたりとも干渉することは出来ない。それを理解して、また不快感を感じると**い**う悪循環。

無限の闇に支配された空間でそれは待**つ**。己が主は未だ現れず、ただ悠久にも似た時間の流れに身を任せ。

朝日が昇**つ**て来た頃、ようやく俺とリンは麓に見えた街に辿り着いた。少し賑やかな喧騒が耳に付く。いくつかの視線がこちらを捉えるが、よそ者と思っただけで特異なわけでもない俺の興味など、すぐに失くし雑多な雰囲気**に**埋没する。

「賑わ**つ**てんなあ。何かイベントでもあ**ん**のかねえ？」

「さあ、どうかしら。前回**み**たいなのは嫌**だ**わ」

「嫌**つ**て言う**け**どさ。誘**つ**た俺**が**言う**の**も**な**んだ**が**、ほと**ん**ど戦**つ**

てないよな」

軽く睨にらまれたのは、揚げ足を取られたことに対するものではなく、リンの本心を知りながらも言ったからだろう。戦いたくないという優しい心情に。

それを受け流しながら、少々わざとらしいと自覚しつつも市場の品に目を走らせる。肉、魚、野菜といった食品が所狭しと立ち並びつつも、明らかに景観を壊しているものを売っている場所もあった。武器という殺す為の道具。画面越しのゲームなら違和感など微塵も感じなかっただろうが、現実として見るとアンバランスという言葉じゃ済まされない。

「取り敢えず、酒場に情報収集にでも行くか？」

「そうね、お酒も飲みたいし」

酒場の喧騒は猥雑わいざうの一言に尽きた。まだ早朝だと言うのに、むっとなるような酒の臭いが充満した部屋だった。広い部屋に酔い潰れた客がだらしなく倒れ、動いているのは酒場のマスターと思しき男おほとカウンターの端に腰掛けた少年だけだった。

「ユージ君じゃないか。何故ここに？」

「あ、カズヤ。久しぶり……でもないか。タツキが、ちょっとね」「喧嘩でもしたのか？」

そんなとこ、と言いつつジュースを啜すする。その横顔に憂うれいはなく、暇を持て余した様子が見て取れる。

「マスター、トマトジュースくれ」

何となく言ってみただけなのだが本当に置いてあるようで、しばらくすると赤い液体で満たされたコップが目の前に置かれた。本音を言つとトマトは嫌いなのだが、無いと思っていた俺が馬鹿だった。「ふふ、子供ね」

「悪かったな。朝から酒が飲めるか」

リンはその横で普通に酒を頼んでいたが、俺は濃厚な味のするトマトジュースを一口含む。一口目で吐き気を催すトマトの味が口内を満たし、二度も口を付けるのは躊躇われた。

「なあ、ユージ君。戦ってくれないか？」

目を見ず言った言葉だったが、ユージ君の表情には困惑のが広がっているのを感じた。俺とて力量の差を理解していないわけではないが、前回の世界では理由も分からず狙われた。切ったカードは一枚だが、俺にとっては持ち札の全てだった。

「強くなりたいんだ」

「ふうん、悪いけど興味ないね。でも、暇だから少しだけ鍛えてあげよ」

内心を察したわけではないだろうが、楽しげにジュースを飲み干す。

「さ、じゃあコート脱いで」

「は？」

「いいから、いいから」

少し待って、と言い残しコートを持ってどこかへと消えていった。しかし、体格は俺とそう変わらないはずなのに凄い腕力だった。有無を言わず、コートを持ってかれた。

「カズヤがコート着てないの久しぶりに見たかも」

「そうだった？」

俺は忘れ癖が酷く、脱いだ拳句そのまま忘れることがあるのだ。自覚しているからこそ、俺は出来る限り脱がない。コートの下は黒無地のシャツにブラックジーンズ。ロングコートで隠れているから普段は見えないが、中は動きやすい服装なのだ。

「中も外も黒よね。好きなの？」

「着れりゃ、何でも構わんけど。たしかに、黒か白しか着ないな。それも黒寄りだし」

ロングコートも中も真っ黒。黒が好きなのかと訊かれたら、そうなのかもしれない。決して性格が黒いのが反映されて、などという理由でなければいいのだが。

どうでもいいことを苦惱しつつ、トマトジュースにもう一度口を付けるべきかどうか悩んでいたときユージ君が戻ってきた。手には

持って行ったはずの俺のコートがある。手渡されたので受け取ったが、その感触に確かな違和感を感じた。その違和感の正体に気付くぬま袖そでを通す。

「あれ、もしかして縫ったの？」

「まあね。さて、街から出ようか。ここじゃ満足に戦えないし」

切られていた部分などが新品かのように綺麗になっていた。先程感じた違和感はこれだったのだろうか？

同時刻、タツキは珍しいことに一人で行動していた。別に轉移させられたときに仲間とはぐれた訳ではなく、理由は単純にユージ君と口喧嘩。実際の所は、タツキが一方的にユージ君に口負けたしたためであった。

そう、事の始まりはユージ君の一言だった。

「タツキって活躍してないよね」

内容は思い出すのも嫌だが、タツキ自身が弱いということだった。売り言葉に買い言葉ではないが、男の微妙な意地とかが反論させた。

「そんなことないって!!」

「いつも最後のとどめは僕が刺してるよね？」

「それはユージ君が横取りするからだろう!!」

「タツキが一向に敵を倒さないし」

ぎくつ、と身を強張らせた。ユージ君の言っていることは正論だった。威勢よく戦いに挑みつつも、ユージ君に獲物を横取りされる手こずっているタツキを見て、ユージ君が苛立ち捻り潰す

のが常だ。今までは戦闘を楽しんでいるだけであって、殺すことを楽しんでるわけではなく気にはしていなかった。だが、思い起こせばいくつか思い当たらないでもない。

「いや、でも……!!」

「まあ、仕方ないよね。タツキは弱いしね」

「うわー……ん!!」

「あ、タツキ……」

走り出したタツキを見てユージ君が声を掛けた。追いかける素振りには欠片もなかった。のだが、それで止まるような男ではなかった。それが事の顛末だった。

そういう事情で日が昇っても尚、薄暗い森の中を単身進んでいた。それで切れるようなプレイヤーと仲間の繋がりでもなく、何時かは戻らねばならず今はただ放浪していた。

「あー、誰でもいいから撃って気晴らししたい……」

呟きは静寂が包み込む森へ溶け込んでいった。しかし、よくよく考えてみれば言っている事は通り魔と大差ない。そのことに気付いていないわけではないが、ゲームとしか捉えていない故に人を傷付けることに躊躇いはない。

森にいたのはタツキだけではなかった。背のやや低い体軀を鎧で固め、派手な装飾のされた剣を一振り背負っている少年がいた。黒い髪を坊主にして、身長は百五十を下回るくらいしかない。鏡八が見れば機動性の落ちる鎧はまだしも、派手な作りの耐久度の劣る剣に呆れただろう。はつきり言って、見栄えはいいかもしれないが外見からして雑魚と知れる。

彼の目的は強い仲間を探すという一風変わったものだった。その考えだけなら変なものではないように思える。だが、プレイヤーが強い仲間を擁しているのは個々の能力差によるものもあるが、偏にプレイヤーの育て方によるものであることを彼は知らない。いや、

プレイヤーが知ることの出来るものではない。

ふいに足音が聞こえ、体を強張らせる。近くの木に背を預け、その向こうの気配を探る。気配の主は規則的な歩幅で、まるで散歩をするかのような気安さで一直線にこちらへ向かってくる。

「見つけたぜ！！」

楽しげな声が耳に流れ込んだと感じたときには、既に木諸共前方もろともに身を吹き飛ばされていた。すぐに起き上がりつつ、背後を振り返る。そこにはロケットランチャーを構えたタツキの姿があった。

「ひいひい！！ 助けて！！」

頬を流れた血が地面に落ち、絶叫しながらも彼は逃げ出そうとした。重たい鎧を鳴らす不様な様子ふさまは、タツキの心を大いに満足させてくれた。悠然とした歩みで銃弾を撃つ姿は、狩りを楽しむ肉食動物のそれだ。

それ故に、タツキは気付かなかった。彼が流した血が幾何学模様きかがくを作り、この世界と異世界との境界線を曖昧なものとしたことに。そして、封印は解かれ彼の者は姿を現す。

「近い……感ジル」

悠久の時は、もう間も無く終わろうとしていた。暗闇に支配された空間は震え、今にも解き放たれんばかりに軋み崩壊の序曲を奏でる。だが、空間は微妙な均衡で壊れなかった。まるで体中を縛った鎖が、残り一本だけ外れないような危ういバランス。

それは待つ。時間の概念すらも現実とは違う隔離された世界で。

街外れの森は静寂を保ち、独特の警戒心を強めさせる。誰もいな
いから音が立たない、などという馬鹿な話はない。風を使えば空気
の振動は消え、音は届かなくなる。相手の精神に働きかけるものな
ら、聴覚を弄る^{いじく}だけで音は聞こえないと錯覚させられる。聴覚は当
てにならず視界も悪い。能力を駆使する者なら、ここで戦闘をし
ければ独壇場だ。

狙われたのはまだ昨日のことなのだ。安心など出来るはずもなく、
結果警戒心は増え神経は際限なく摩耗させられる。

「ふふ、安心していいよ。ここから百メートル以内には僕たち以外
の気配はない。熱源も感じられないしね」

見透かされたかのように、安心させる笑みを浮かべる。僅かな拳
動で内心を読んだとでも言うのだろうか？

「リン離れてくれ。警戒を頼む」

「さて、どこからでもいいよ」

リンが離れていくのを視界の隅で確認しつつ、静かに剣を抜く。
派手ではないが装飾のされた剣は、俺の趣向とはそぐわない。対し
てユージ君は片手剣を下げたまま構えをとらない。

「行くぞー!!」

接近しつつ袈裟斬り、突きを繰り出すが最低限の動作で回避され
る。その顔には、うっすらと笑みさえ浮かんでいる。上段からの振
り下ろし、横薙ぎの一撃も全ての攻撃が読まれているかのように異
常な反射速度で反応してみせる。

「ちっ!!」

逆袈裟に斬り込み、風を使って全周囲からの同時攻撃。

「甘いよ」

十分な余裕を持って剣を弾き、陽炎のような淡い火が身を覆った
と思ったときには風は全て燃やされていた。舌打ちを一つして剣で
苛烈に攻める。脳が真っ白になって何も考えられなくなるまで、目

の前の少年を。

タツキの強さ

ここまで攻撃が当たらないというのは、幻影と戦っているのではと疑ってしまう。それ程までに目の前の少年は素早かった。全ての太刀筋は触れることすら出来ず、全方位からの攻撃は最低限の動作で防がれる。

一時間弱、それが戦闘時間だ。神経は摩耗して剣筋は単調なものになっている。最初はなにかと喋っていたユージ君も無言になり、それどころか眼光は鋭いものになっている。

「おら、隙だらけだぞ!!!」

防戦一方だったユージ君の思わぬ反撃に防御も出来ず、コートの上から切られた!!! 物凄い衝撃に耐え切れず倒れてしまう。

「がはっ!!! げほっ!!!」

「あ、ごめん!!! 攻撃しなければ戦闘状態にならないと思ったんだけど。まあ、斬れてないし大丈夫だよな?」

斬れてない? 剣で切られたんだぞ!? 倒れた状態から腹の感触を探るが、痛みのでいで下半身が繋がっているか分からない。仕方なく上体を少し持ち上げ見てみるが、下半身は繋がったままだった。

「喜んでいいのか、不思議と困るな」

「コートを作り直しておいて良かったよ。見た目は変わらないけど、耐久性は紙と鉄くらい違うはずだよ」

感じた違和感の正体は綺麗になったことではなく、改良されていたことだったのか。納得しつつも、切られたというのに五体満足でいられる理不尽な耐久性に呆れる。質感は普通の服と変わらず曲がるし、鎧よりは破格に軽い。

「骨も折れてないし大丈夫だね」

「考えてみれば、ユージ君なんでも出来んな。料理も美味しいし、コートも作るし」

「出来て当然だよ。だって僕は」

最強クラスだから。それは傲慢しつまんでもなく過大な自信の表れでもなく、厳然たる事実として述べただけ。そして、それを認めさせてしまえる強さが彼にはある。だが、彼は悲しそうにそれを言う。その声音はイツチーと似ていると思う。

ふと浮かんだ疑問を投げかけてみた。

「最強って何だろな？」

「さてね。純粹な肉弾戦なら僕は誰にも負けないし、反面イツチーは能力を使った戦闘なら右に出るものはいない。でも、最強クラスって言うならそれで構わない。でも、ゲーム内の最強は何でも出来ることにあると思うよ。あらゆるものを作り出し、身体能力に長けた、誰にも負けない」

そんなものなのか、と漠然ばくぜんと思った。それが正しいのか俺には分からないからだ。いや、誰にも分かるはずがない。最強なんて決められたクラスでもないのだから。

「じゃあ、タツキは最強になる素質があるのか？」

「え、どうして？」

単身で何でも出来るユージ君が、タツキと一緒に行動するメリットは少ない。世界を越えるという行為くわいに拘こだわるなら理解出来るが、理由が見つからないのだ。

「ふっ、面白いことを言うね。大体言いたいことは分かったけど、それは違うよ」

「じゃあ、ユージ君にメリットがあるのか？」

「あると言えばあるね。でもね、彼はプレイヤーの中では奇抜な存在だよ。プレイヤーはアリののように蔓延はひっているけど、たった一人だけなんだ。あれは一群を率いる将の器だ」

実に面白そうに言う。だが、よく考えてみれば異質なことだ。一般にプレイヤーは複数の仲間を作り行動していく。表面的に見れば既存のRPGのシナリオそのものだが、数万もの仲間を作るなど通常ありえない。プレイヤーは自身の強さに固執こじつする為、仲間を積極

的に作らないからだ。

「でも、よく分からないな。特異なのは理解出来るけど、タツキは強いのか」

「タツキ自身は弱いよ。でも、タツキは強いよ」

謎かけのような訳の分からないことを微笑で覆い隠す。それは理解させないためなのか、本当のことを言っただけなのか。

『グアアアアア！！』

突如、耳を劈くような咆哮が世界を震えさせた。森に出現したの
は三十メートルはあろうかという巨躯。力強い双翼と逞しい体つき
で、薄紫色の体表を血のような真紅が彩っている。

「何だ……竜？」

形容するなら竜で間違いないのだろう。飛ぶことが出来ないのか、
それとも飛ばないのか、竜は地上に留まったまま何かを探るように
視線を巡らせる。

「うわああ！！ 何だこいつは！？」

今まで弄んでいた少年は、鎧を鳴らし腰を抜かしている。拳銃を
突きつけられた状態だというのに、叫んでいられるのは驚きのせい
か。一瞬、目の前の少年を殺してから竜を対処すべきか悩んだ。

しかし、それについて思考するのは全くの無意味だった。引き金
に掛けた手に力を込めた瞬間に、竜の前足が振り降ろされていたか
らだ。迎撃など出来るはずも無く、身を投げ出すように前に飛び転
がる。

「？」

起き上がったっても攻撃の気配はなく、おかしく思い振り返る。振り
降ろされたと思っていた前足は空中で完全に停止しており、少年は

悲壮な顔のまま固まって意味をなさぬ言葉を紡いでいる。

「あわあああ……！！！」

足がゆっくりと踏み下ろされ、土埃ちちほこが舞う。少年は腰を抜かしたまま動かず、竜は少年を射抜くように見つめる。数分ほどの膠着じょうちやくの後、その変化は起きた。竜が小さくなり始めたのだ。二十メートル、十メートルとなり……やがて、それは人の形を成なした。

少女だった。長い髪は体表と同じ薄紫色で右目は血のような真紅、左目は翡翠色の虹彩異色。

「あなたが主？」

「主……？」

少女はどこか抑揚おさげのない感情の感じさせない声音で話す。対して少年は呆けた表情で見上げるばかりだ。主人公とヒロインのような構図だが、生憎はたと傍から見れば攻撃のチャンスとしか思えない。だが、竜というものと戦ったことは未だ経験いままがない。攻撃のタイミングが掴めない。

「取り敢えず、ライフルでぶち込むか……」

二脚を使って安定させた対物ライフルアンモリアルのレンズから覗き見る。少女がこちらを見ていた。視線が交錯したと思ったときには反射的に引き金を引いてしまっていた。

音速を軽く越えた速度で弾は少女に飛ぶ。当たったと思ったが、腕に防がれていた。ただし、少女の細腕ではなく逞たくましい竜の剛腕だった。

「主は傷付けさせない」

「てかさ、あんたら誰だ？ 名前聞いてないんだが……。雑魚敵だと思っっていたんだけどな」

ライフルを放置したまま、上着から二丁拳銃とインカムを取り出す。装着して呼びかける。

「全員集合、ショータイムだ！！」

戦闘開始だと告げるように、音高く銃声を鳴り響かせる。

「あれ、竜か？」

「うん、みたいだね。しかも、タツキの現在地はあの辺りなんだよね」

頭を？^かきつつ、困ったように言う。何故、お前はそんなことまで分かる……？

疑問を一瞬脳裏に抱いた^{いた}が、そんなことで驚いては身が持たない。熱源を感じたのかもしれないし、気配があつたとか非現実的な感覚で理解したのかもしれない。

「助けに行かないのか？」

「それが、あれ魔竜って言っただけで中々に手強くてね。単体での戦闘力じゃ群を抜いてる。倒すのが面倒なんだよね」

面倒と言っただけで、倒せないとは断言していない辺り余裕が窺える。助けに行かないとなあ……、と言いつつ^{しづ}渋るのは仲間としての最低限の義理か。

「行って来たら？」

「うん、決めた。丁度いいし、カズヤも行こう。リン、君は宿を探しているといい」

走り出したユージ君の後ろ姿を見送りつつ、リンはどこにいいのかと考え一瞬行動に出遅れた。

「行くの？」

「ああ、宿取つといてくれるか？ ちょっと行ってくるよ」

何時の間にか後ろに立っていたリンに答え、遠くなった後ろ姿を追いかけて走り出す。

「流石に速過ぎるだろ！！」

ユージ君の速度は風か地を走る稲妻のようだった。普通に走っているとは追いつけそうにない。後ろから風を吹かせ、半ば吹き飛ばさ

れるように無理矢理距離を詰める。ほとんど地に足を付けていないに等しい。制御が難しくアドリブでやりたくはなかったのだが、風で空中を飛ぶ。

「あ、それいいね。どうも炎じゃ、戦闘に使えても応用が利かなくてね」

笑いながらも息は切れておらず、気付いた時には姿は消えていた。「嘘!? 有り得んだろ!!!」

一段とギアを上げて、その姿は遙か先にあつた。追いつくためにスピードを上げるが、速過ぎて体は軋んで限界だ。これ以上速度が上がると、体がバラバラになりそうになる。

悠々と走るユージ君のペースは変わらず、見えなくなってしまう。止むを得ず、直線的なコースに切り換える。これならゴールの差はほとんど出ないはずだ。

「うおおおらあ!!!」

見通しは甘かったことを思い知る。木々を抜けた先、山頂辺りにいる竜とユージ君は交戦していた。片手剣一本で足を切り裂き、蹴り殴る。傍目から見れば蟻ありと象とまでは言わないが、それに近い印象を抱かせる。

「結局俺は何したらいいんだ?」

竜の攻撃対象には含まれていないようだが、時折吐く炎のプレスに当たりそうになる。

「うおおおりゃ!!!」

「死ね、死ね!!! フハハハ!!!」

タツキとユージ君の連携は見事なものだった。タツキの苛烈な射線上でユージ君は戦っているはずだが、その体は一発の弾丸も掠かすることはない。見事の一言に尽きると言えるだろう。こうも息が合うなど、どれだけの修羅場を共に掻い潜ってきたのか。

だが、竜は巨大過ぎた。どれ程の弾丸を浴びせても、どれ程切り刻んでも死なない。

「全・弾・発・射・!!!」

タツキが勢いよく上着を広げたかと思うと、その内側から数え切れぬ弾丸とミサイルが放たれていく。哄笑ウツクシしながら苛烈な攻勢を見せるタツキの姿は、恐ろしいの一言に尽きた。

「めんどくせえな、おい！！ ははは、いいぜ！！ もっと楽しませてみるよ！！」

ユージ君は剣一本での戦闘によるものなので、どうしても限界がある。タツキのように派手さにも欠ける、だが物凄い速度で繰り出される剣戟けんげきは恐ろしい。

だが、二人の熾烈しつれつな攻撃でも竜は倒せないでいた。

「こんなの倒せるのか？」

「倒せるよ」

ユージ君の一言は意外に近い場所で聞こえた。気付けば何時の間にか攻撃は止み、竜だけが動いていた。

「彼には才能があるんだよ」

タツキは真正面から竜を睨んでいた。先に動いたのは竜だった。前足を振り上げ、タツキを押し潰そうとした。だが、その腕は振り下ろされることはなく空中で止まっていた。

「攻撃開始！！」

タツキがインカムに向かって叫んだ。空気が揺らいだように感じて、目をしばたかせる。

「何だ、これ！？」

驚いてしまうのも無理はない。空と大地を埋め尽くすかのように、人と機械で溢あふれていたのだ。オマケに、ヘリや巨大な人型のロボットまであったりする。空中で不自然に止まっていた前足は、人型ロボットが受け止めているからだった。

驚きが支配して、次に戦慄せんりつした。これ程までの練度と人数を、たった一人のプレイヤーが動かしているのだ。これだけの戦力なら何が相手でも負けることはないだろう。光学迷彩でも使っているのか、直前まで姿を見せなかったのは凄かった。

そして、集中砲火が始まった。それは残虐であり、理不尽な一方

的な戦いだつた いや、戦いと呼ぶことすらできない。

『グアアアアアアアアアアアアアア！！』

天地を轟かせんばかりの悲鳴。それに、多種に渡る武器と能力の嵐が加わる。大きいとはいえ、この物量で戦ったら勝ち目などない。竜が完全に動かなくなるまで、そう時間は掛からなかった。

「攻撃、止め！！」

ぴたりと止んだ攻撃の後には、息も絶え絶えな竜が残されるばかりだ。竜の形を保つのも辛いのか、人型に戻っていく。

「おい、大丈夫か！！」

「あ、まだ生きてたんだ……。撤収！！ 撤収！！」

先ほどの鎧を着た少年は生きていたらしく、少女の元へと駆け寄る。

そして、逆にタツキの仲間たちは撤収していく。ユージ君が、あれはいいの？ と訊いていたが、タツキは、いいと答えていた。

「凄いな……」

「分かった？」

「ああ、強いな。個人ではなく、集団を使って戦うプレイヤーはいない」

それがタツキの魅力なのさ、と言い残してタツキたちは消えていった。後に残されたのは、俺と少年と竜の少女だった。微妙に居づらい雰囲気、その場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9011r/>

K-GAME

2011年10月6日03時24分発行